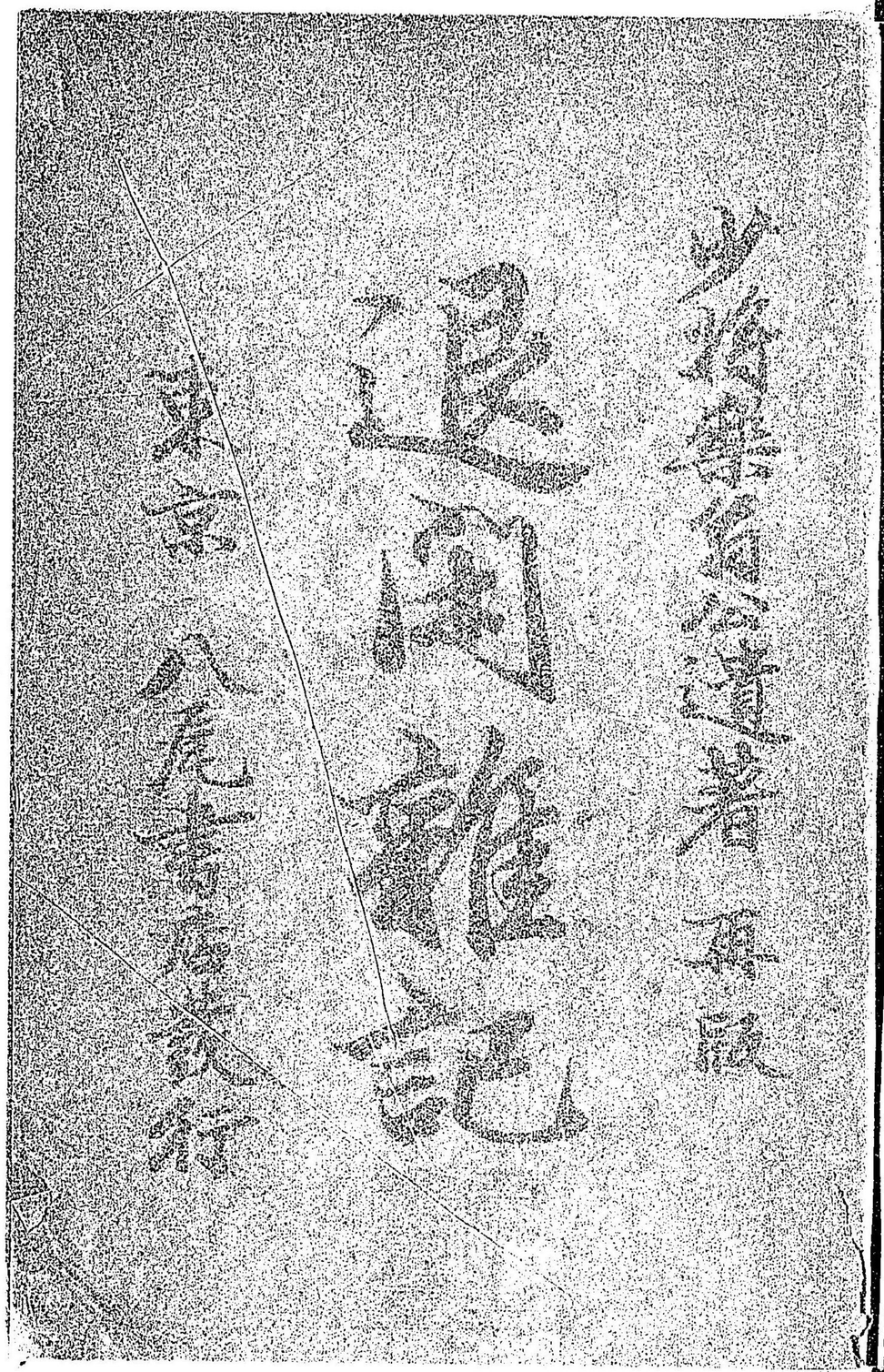
退閑雜記



九二年六月廿二日
北原氏

少將樂翁公遺著 再版

退閑雜記

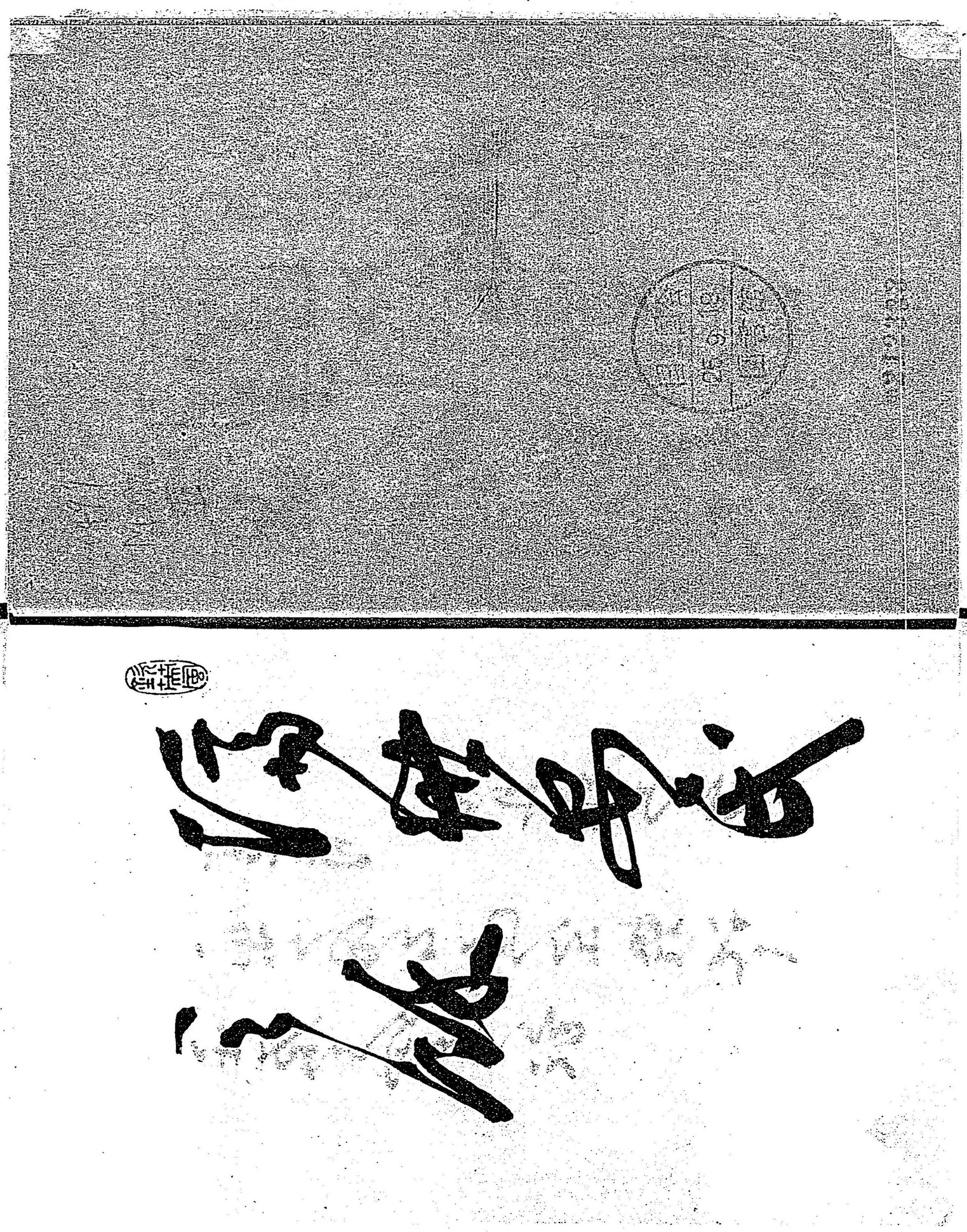
東京 八尾書店發行

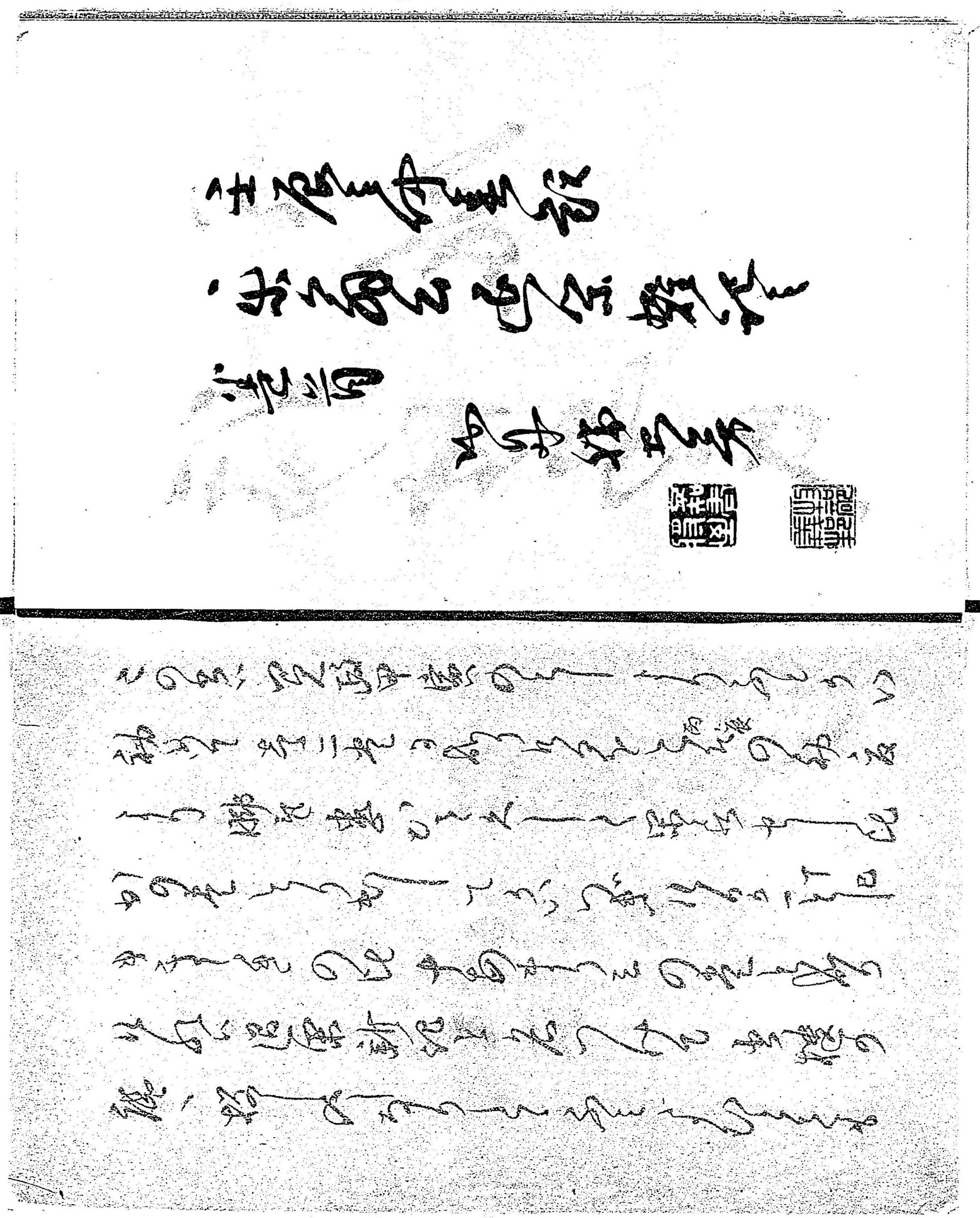
法隆寺

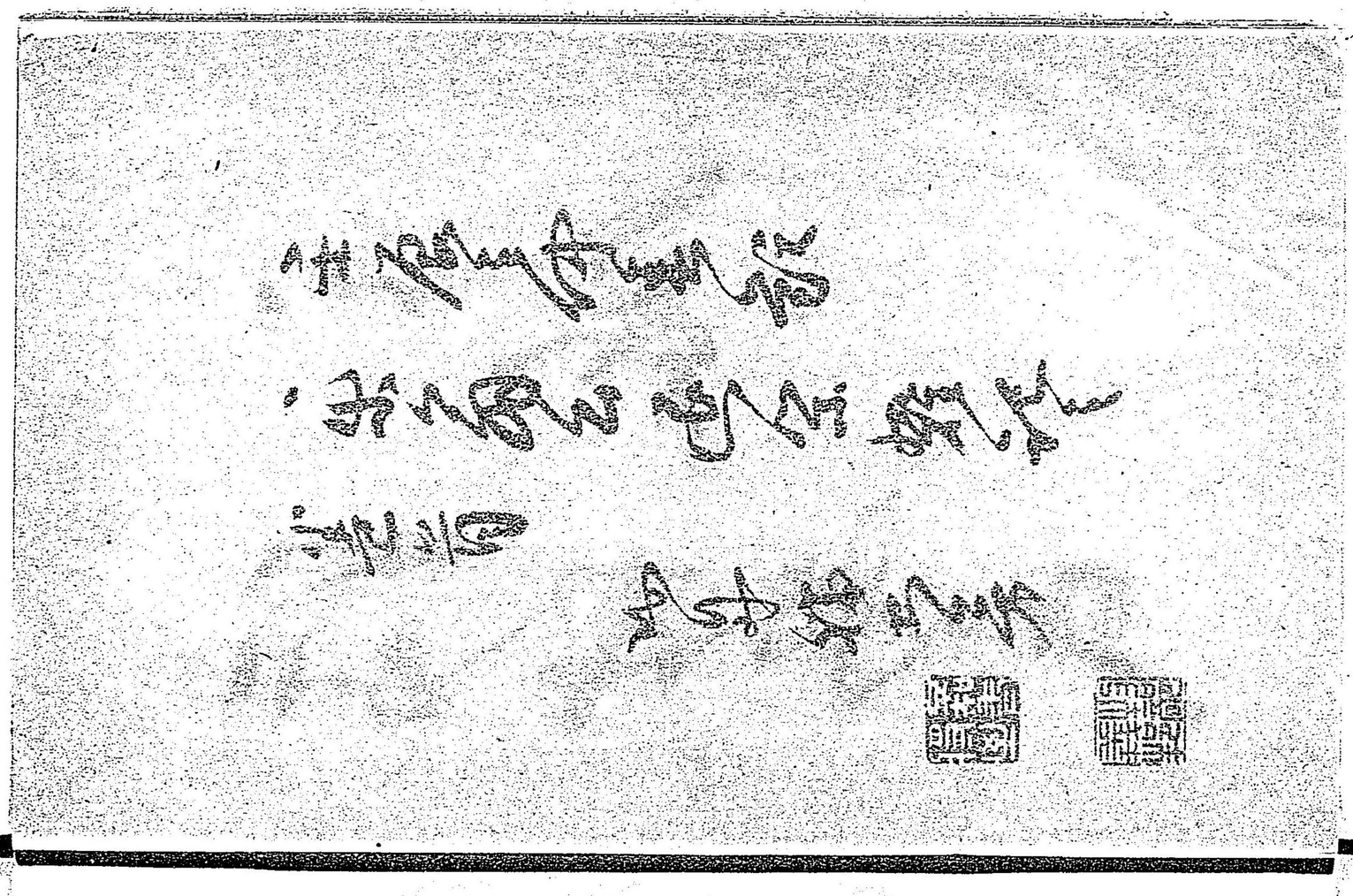
049.1
M282t
E

国立国会
25.9.19
図書館

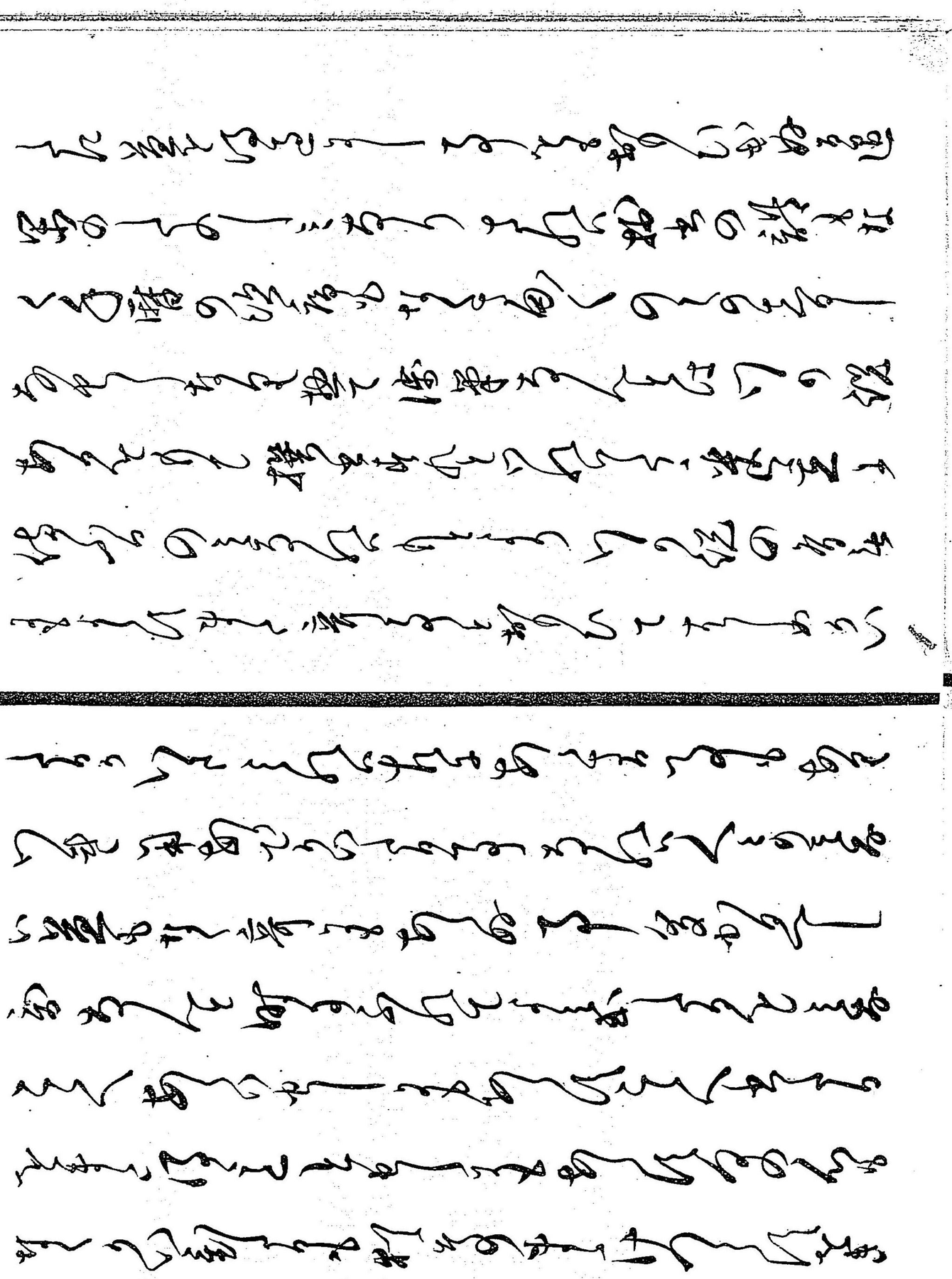
212333

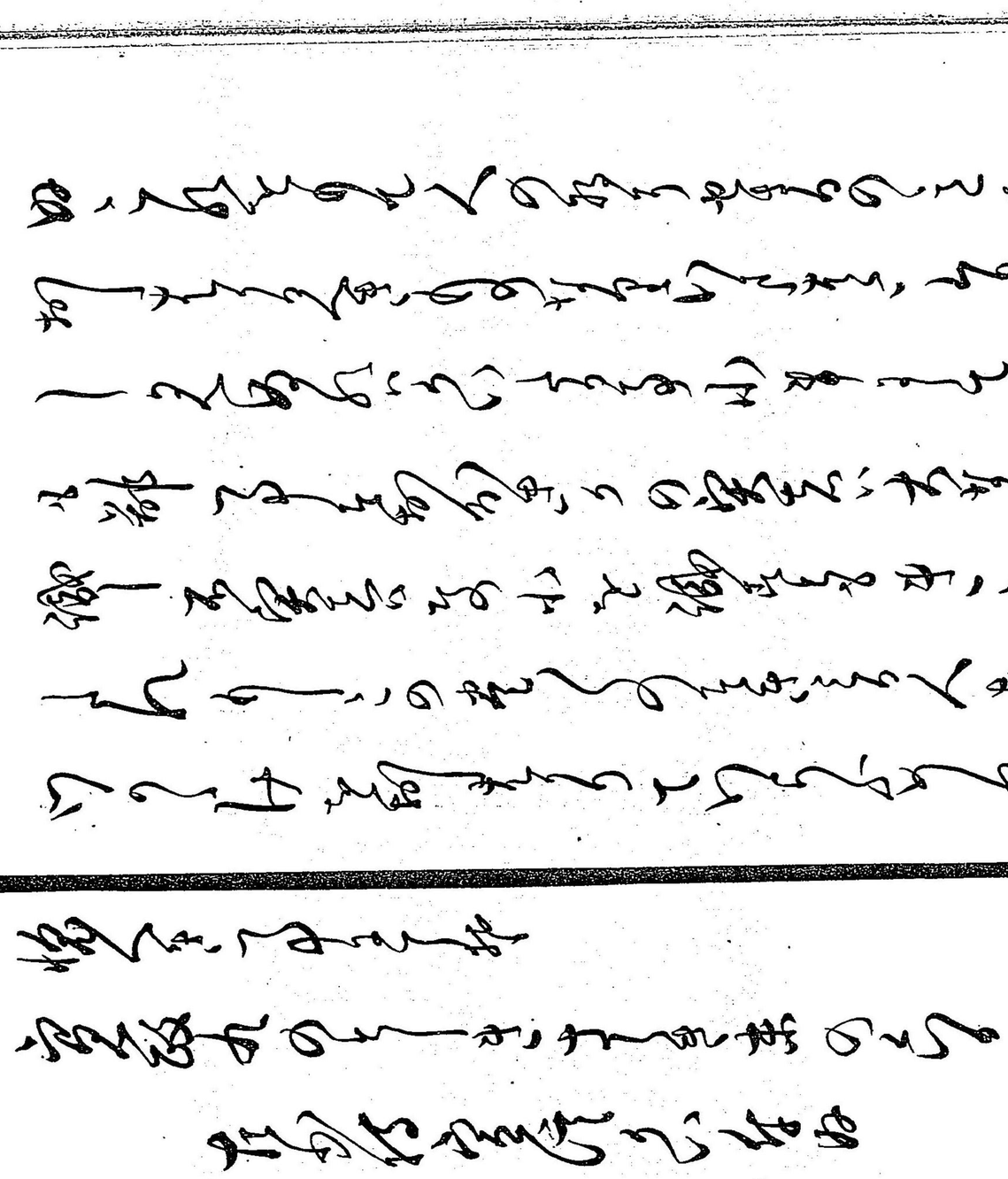






[illegible]





緒言

一舊藩中傳フル所ノ退閑雜記寫本數部アリ余家亦一本ヲ藏スレモ傳寫ノ誤謬少カラス今者初テ公カ親筆ノ原稿ヲ見シカ其屢添削潤色ヲ經タルヲ以テ塗抹縱横殆ト讀ヘカラサル者アルニ至ル蓋三回ノ親閲校正ヲ重ネテ完成シタル者ノ如シト雖トモ惜哉其淨寫ノ成本ニ至テハ後篇四卷ヲ併セテ散逸ニ歸シ今其所在ヲ知ル能ハス

一寫本ハ原稿校閲以前ニ出タルヲ以テ紀事文章共ニ多少ノ異同アリ固ヨリ成本ト爲スヘカラス本編ノ校合ハ專ラ原稿ニ據リタレドモ其蠹蝕汚損シテ讀ベカラサル所ノ者ト後篇四卷ハ全ク寫本ノ舊ニ就テ謄寫シタル者ナリ

一原稿寫本共ニ讀ベカラサル文字ハ假ニ圈標ヲ塡メテ以テ疑ヲ

存ス

一原稿ノ筆記多クハ公ノ親蹟ニシテ高尚清雅ノ態尤モ敬重スベキモノアリ今其序文及標題ヲ寫眞シテ之ヲ本篇ノ首ニ留ム

一原稿所載漢文ノ抄書ハ六十餘種ニシテ數百節ノ多キアレドモ寫本ハ悉ク省略シタリ其間公ノ論說ヲ付スルモノハ稀ニ之ヲ留ムレモ亦原文ノ全キヲ存セス頗ル隔靴搔痒ノ憾ヲ免レス本編ハ勉メテ收錄シタリト雖モ其論說ナキモノニ至テハ寫本ノ例ニ從ヒ之ヲ省略シタリ蓋シ原書散逸シテ俄ニ校合シ難キヲ以テ也今其書目ヲ列記シテ以テ他日校合ノ便ニ備フト云

焦氏類林　靜寄餘筆　焦氏筆乘　日知錄
居家必備　委巷叢談　香譜　宣齋野乘
資治通鑑　宋元通鑑　宋紀事本末　唐書

歐陽歸田錄　實用篇　徐氏筆精
養魚經　春雨雜述　遵堯錄
群談採餘　水東日記　鐵網珊瑚
黃氏日抄　匡謬正俗　墨史
酒經　藝苑扈言　農事直說
帝京景物略　博物類纂　禮記
左氏傳　長者言　尚書故實
瓶史　餅花譜　談叢
可談　拊掌錄　錢氏私志
次柳氏舊聞　貢父詩話　草木狀
帖箋　紙箋　隻塵談
寄園寄所寄　香祖筆記　裨陽雜記

楊升庵外集　容齋隨筆　廣見聞錄　野客叢書

一編中每節ノ圈標及濁音句讀ノ符點は原稿ノ無キ所ニシテ本編之ヲ加フル者ハ敢テ古體ヲ損スルニアラス特ニ披閲誦讀ノ便ニ供スルノミ

明治廿五年三月　桑名　江間政發謹記

退閑雜記卷之一

○びいどろ板をきるには、かねのまがりかねのごときものを火中へいれ、赤く成らんとするとき取出し、切べきところへおしあて、そのあてぬるあとへ、少し水をそゝぎ侍れば、忽ちきるゝなり、

○松前の人蝦夷地へ行て、めしくひたるを、蝦夷人うらやみてのゝきぬたり、これをみて食をやりければ、いとみぐるしく喰ちらしたり、米ほどたうときものはなきに、いかでくひちらし侍るぞ、なを拾ひて喰つくせよといたくしかりけり、蝦夷人唯々としてゐたりしが、あまりつよく叱りければ、日本の人こそさこそあるべし、われは魚を喰てこそ、命をつなぎぬるなり、米はたゞくへぞ、たうとくは思はずといふにぞ、興に入て、さらば汝ら魚によて命をつなぐならば、魚

をこそたうとく思ふべし、さるに鮭の皮をとりて、履にしなすにあらずやと云ければ、しばらくして、わらは米より出るものなり、そのわらをもて草履つくりて、日本人の足にし給ふもおなじ事とは云ける、まことにおそるべき事なり、

○草木のはなを大きく咲せぬるには、鐘乳を末にして、根へしきぬれば、大きやかに咲とはいふ、

○草木の實、多くむすびぬるやうにとおもはゞ、春のうち二三度も鹽硝水を根にそゝぐべし、

○九十月になり、鹽濱の砂上に霜のごとく見ゆるを、はき集め煑て鹽硝とすと、本草彙箋をひきて山口剛三郎が云しなり、芒硝の類にはあらざるや、いまだこゝろみず、

○大磯に井上才藏といふものあり、或夕蛙の椽の下より出しを、杉の

まくらをけづりて、其かはづのかたちをほりたるが、其夕より蛙出ずなりにけりといふ、今も江戸へはときゝ出るなり、いと彫琢妙を得たりといふ、

○近き頃より京師にて、銀粉を金粉になすなり、その製は、銀粉を常のごとくときて、そのうへに手牡丹などいふ、花火の火をひとつおとせば、一盃中の銀、みな金色をなすといふ、

○犬はりこべの汁（冬はかげほしにし、水をいれすりつくる）をつくれば乳岩愈、

○牽牛子はよく腸胃の穢物をさる、本事方に、牽牛子其頭末をとるとあり、其法しらず、しかるに黑牽牛子一斤百六十目を、夏は日のてるあたりへをき自然とむし、冬はその百六十目をわけて紙につゝみ、人々三日ほど懷に入てあたゝめ、其うへにて末にす、其末のうちよりたゞ十目とりたる是頭末なり、其功はなはだ多く、廿目は少しお

とり、三十目四十目五十目はそれ〳〵おとる、そのとりたるあとはいかに用ひても驗功なし、かねてとりたるも功なし、用ゆべき其日にとりて、其餘を捨るなり、用ゆるときは雨などふらざる折をよしとす、尤も病人いぬるとき用ひ、その夜いさゝかもひへさる樣にするなり、吐逆の氣味ありといはゞ、をこして胸をおさへ吐せしむる事なかれ、吐すれば瀉下十分ならず、十分瀉下のきざしあるときかわやへ行ば、穢物一時に一二升下る、手足なへしびれ、その瞑眩はなはだし、水をもてこしを冷し、鹽湯をのゝすれば、忽ち瀉下やみて、いさゝかもつかるる事なし、十目とりたるは容易につかひがたし、尤も十目とりたるも、そのうちを痛風などの類には四十目とりたるを用ひ尤も功ありとそ、是福井の直傳なり、頭末の事其餘の三四目も一味のまゝなり 説もあれは未試、

○崔亂の吐瀉もなく、手段つきたるには、むぎわらもてつくりたる蛇を黑やきにして用ゆれは、忽ち効ありとなり、崔亂わづらひけるものありけり、たづぬれども蛇はなし、むぎわらの笠なりけるを、いろりへうちいれて燒て用ひしかは、忽ち吐瀉して治したりと、見し人かたりしとなり、

○伊勢の國射和ワヰサにては、むかしより水銀いづるなり、古畫にも水銀ほりてふものあり、いまも輕粉をこゝにてうる、むかしはこの水銀とりてやきしが、いまは舶來のをかいてやくなり、

○鰹の毒にあたりしには、敗毒散または小柴胡湯に三寸計りなる釘十本入れ、せんじのめは忽ち効あり、椎の木よりいづるくさびらをせんじのむもよし、

○嘔をやむものあり、食すれは多く吐、一日その父のところへ行たるに、食しても吐せず、またかへれば吐するなり、されゞまづ父のかた

へ行てくひみよとて、行は吐せず、いかなる事ともしるものなし、さるにこの父はサボテンをいとこのみて、盆にうへて多くをけり、サボテンは嗝を愈すと人いふ、さらばこのゆへ成べしとて、盆のまゝ常に居侍るところへ置、またサボテンをすりて喰しが、つゐに嗝てふ疾いへしとぞ、されぞくひたるものいへぬもあり、疾の淺深によてたがひぬるにやしらず。

○上州に樋口泰翁といふ鄉士代々劒を學ぶ、父は殊に名譽あり、泰翁ことし九十一歳にて健なり、常にいふ、わが術ことに拙し、流義の趣意もしらざりしが、漸く七そしの頃より、少し心得し事ありし、それよりも修行せしが、こゞ九十のときより、またふと心得たることありて、其後は劒つかふにもこゝろよしといふ、是にてつたなからぬはしるべし、念流といふなり、流義に秘す事はなし、たれ人たづぬるともかくす事はなし、劒に理はなし、業より出し理なりといふ、いとかくばし、癸丑のとし七月十日あまり八日、呼て其術を見しなり、

○金から革といふものあり、これを製するには、革に錫の箔をつけ、そのうへに紅花をしぼりたるうは汁をひく、その外のいろは油繪のごとくす、其上にチャンとゐの油を和しせんじ、（焼つくはぢにうる煎じ侍るなり）し刷毛にてつよく摺てぬり侍るなり、

○油繪のあぶらは、ゐの油一升に郡錄五錢月入て、半はぢにせんじ用ゆるなり、外にとうがらしなんぞいれたるいかへつてあし、

○癸丑の秋、松平乘寛朝臣（和泉守）のもとへ、吹上のしらきくを盆にうへておくりぬ、

吹上の濱のしらきくうつしうへぬ、花咲侍らば見せ參らすべしと、乘完朝臣へ、約したるが、いまみせまいらすべき事叶

ひがたし、されど掛劍の情やむべくもあらざれば、かの靈前へ備へ給はれとて、乘寛朝臣へ參らすも、只追慕の涙をとどめかねぬ侍りぬ、

これもまた、波かあらぬかわか袖は、ぬれそふ露の白菊のはな、

○塙撿校保己一は名高き盲人なりけり、和學をよくし、或令式ものかたりものなど講釋し、または類聚もの多く板行し、いまゝ水府へいでゝ日本史の校合にあづかる、寛政五年のころ、朝に願ひて和學校所とりたつべき旨にて、地所を下し給びける、その學校の名を予に乞ふことしきりなり、故に溫故堂とつけよと、人をもて云やりたり、

○當麻のまんだら緣起は、かまくら光明寺にあり、この畫の末に、古土佐の筆なりと、狩野永眞がかいたる跋ありと沙汰したるに、左にはあらず、ゆへに別に其事かいてやりぬ、

この曼陀羅緣起は、住吉法眼慶恩が筆なり、筆力顯然として疑ふべからず、まいて住吉家の古記に、慶恩が曼陀羅緣起をゑがきしことしるしあるをや、抑慶恩ゝ元曆建久のころ、攝津國住よしの繪所なり、されば こそ詞書せられし後京極殿下と代もあひかなふべけれ、しかるに永眞の證侍るはいかがあらん、よてこの事をあきらかにしらしめんがため、寛政五年八月三日、左少將定信かいつけ侍るなり、

○予退職のゝち、故ありて資愛朝臣（太田備中守）がために、贊書たる事あり、その贊にそへておくりける、

過し頃、田安の御館へ成せたまひけるとき、執政の人〳〵養川法眼の畫に詩歌なんどかいつけ、おの〳〵もちかへりし事あ

公私之別

りぬ、太田資愛朝臣その席に居給はざりけるを、ことにのこり多く思ひ給ひて、畫かゝせて出し侍らば、かならず、其席のごと く詩歌などかひ付たまはれとて、同列の人〳〵へもかたく約し給ひぬ、されど公の事しげゝれはうち過ぬ、いま退職し侍れば、いかで執政の人〳〵に列して筆をとり侍るべき、されどこたび其畫を小子に與へられて、ひたすらに約せしでとくなすべしと乞たまふ、よくかうかへ侍れば、一諾もまた輕からず、その約したる日は在職のときなり、筆とる日の遲かりけるはおこたりなり、これをもて辞すべきもまたことはなし、まゐて公の事などにあづかるにもあらず、只詩歌などかき侍るは、職掌を論すべきにもあらず、いま安藤信成朝臣その約せしのち、執政に成たまひけれど、この詩歌かく別に入たまはざる資愛朝臣

用意周到 但見進退 招還之恨歎矣

の本意なれば、かたく憚をかへりみず、筆を染侍りぬ、されどのちの世退職の小子がこの列にありやと、うたがふ人もあるべければ、そのことのよしをかい付ぬ、たゞ約せし日、かいたるものと思ひたまひて、見給はん事を庶幾するのみ、

小子退職の願ひあまたゝびにおよび、つゐに聖斷をもて其職を免し給ふ、退職のゝちも　御寵遇のあつさいはんかたなし、執政の人〳〵も親しみ給ふ事もとのごとし、いまこの事など憚からず言出侍るも、ひとへに御優待のあつきにより侍る事なれば、聖代のありさまをしめすにたれるとゝいふべきかと、筆をとり侍るも、猶感泣にたえず、寛政五年十月十五日、左近衛少將源定信しるし侍りぬ、

○玻璃鏡は、水銀を何かしらぬ草にて摺つけぬればよくつくといふ、

そのくさは馬の喰ざるくさといふなりと、いとうたがはし、かの魯西亞へ漂流したる人のかたりしとぞ

○高輪に法藏寺といふあり、それが什物に楠正成のはたありと、ほのかにきゝたり、人をしてたづぬるに、法藏寺てふ寺をしる人なし、高輪のあたりをたづぬるに、しらざる人多し、漸くたづねえたるが、いと小寺にて住僧ひとり居たり、什物の事言出たるに、聞しよりげにさま〳〵のものあり、つゐに乞て予か邸へもたらしみぬ、善導大師の名號、十六羅漢の畫などはいとすさうなり、楠正成の冑もあり、いとふるく、吹かへしなどもの只鉢付の板を少し折かへしたるのみなり、是はいかがあらん、菊水の旗あり、菊も墨にてかき、胡粉つけたるものとみゆ、葉もほのかに見へて、錄青つけしあとあり、其紋の下に麻利支天などの像を三ッゐがきしなり、古しへは染しにもあらず、

たゞ畫にかいたる事にもありけるにや、こゝにまた梁武帝の得たる觀音あり、欽明帝の御物となり、つゐに賴朝卿これを持たまひ、それより傳へ〳〵て信玄これを藏む、いま此寺にありといふ、その像もすさうなり、和田義盛が書たる緣起あり、光信がかいたるといふ繪緣起もあり、これは拙し、畫も古くはあれど、町畫師なんどがかいたるなり、

○蠻國にては、外感寒熱などあるには、大根をすりて、その汁を病者の鼻のうちへそゝぎいる、しばらくしてその汁、頭中をめくるやうにおぼへて、くるしきことはなはだし、病者をば正坐せしむ、かくすれば清涕多くいでゝ、忽ち寒熱を解すといふ、齒のつよくいたむには耳のうちへその汁をいるゝといふ、その功も覺へしものあり、

○あるかたより大蝙蝠をみせぬ、琉球の産といふ、大さ猫の子ほどあ

りて、よくりうきう芋を喰ふ、兩便するの外は、常にさかしまに下りゐるなり、物くらふにもさかしまのまゝにて食ふなり、人〳〵見て、嘲くるしかるべしといふ、予きゝて、蝙蝠は人を見て、いつもわが糞するすがたをなすとて笑ふめりと云てたはれぬ、

○京都諸寺院にある光明皇后の佛經あまたあり、よくみればいづかたにあるも、みな同年同月同日の書寫なり、其書一卷毎に巧拙さまさまあり、思ふに皇后の仰をもつて、一日に何卷といふ經を書寫せしめて納め給ふが、皇后の書といま言つたふるにてあるべしといふものあり、

○後三年の畫卷物は、鳥取侯の家にあるをもとゝす、さるに其首卷はかねて缺たりけれど、外に眞物もなければ、缺ぬといふものもなし、寛政癸丑、あるかたより後三年畫卷物初卷一ッ取出したり、かの侯にあるとひとつものなり、これによて人〳〵驚く、予はいまだ見ず、かの森尹祥がもとに來るなり、そのゝちうつしたるをみるに、そのうつしの末に尹祥か書たる事あり、

後三年軍記は、右大將頼朝卿在世中、京都にて書て鎌倉へ參らせられしを、頼朝卿近臣をしてよませられしと東鑑にみゆ、眞衡と秀武との爭ひ初卷ならめ其卷三卷となり、しかるを後年、貞和三年山門一谷の衆徒衆議して、右の詞、能書にかゝせ、新たに畫を書そへしにより、て、卷數は多く成しなるべし、かまくらにてよみしときは、畫なきゆへに三卷にて全備せしを、三卷と心得て、家衡は國司が追かへされぬといふところを上卷とせるならん、出羽守の合戰なきゆへに戰のはじめ不知なり今上中下と外題せしは、遙のゝち元和寛永の間青蓮院宮尊純親王に乞て筆せしなり、其上卷詞の筆者仲直

朝臣、土御門殿寄人 中卷左少將保脩、持明院 下卷從三位行忠卿、世尊寺行成卿十三代孫 畫工は飛彈守惟久也、如此末卷を能書家にて書しならば、初卷も能書家ならめ、しかるに寛政五年六月のころ、或人のもとより尊圓親王の書、鑑定すべきよしにて、予見て見れば、後三年軍記の序文なり、ゐさいは本文にあり、かくのごとくあるべき事なり、右三卷ともに筆者付を書給ふは尊道親王なり、是はあとにて書給ひしにうたがひなし、其ゆへは尊圓親王御在世中、貞和三年には行忠卿三位ならず、貞和年中は尊圓親王尊道親王、行尹卿行忠朝臣、並びて能書在世中なり、貞和三年尊圓親王御歳四十九 行尹卿五十八 行忠朝臣三十六 尊道親王應永十年に薨去、御歳不分明なれど、御長壽にておはせしなり、尊圓親王と御一坐の懷紙眞跡ありて、行忠朝臣の三位に叙せしは、貞治六年の事なり、尊道親王の從三位行忠卿としるし給ひしは、應安永和康曆のころならめ、尹祥考へかくの如し、此序文池田家の本書にそへてあらんには、希代の珍重成べし、おしひかないづれの好事へか手に入、其家の寶物と成たるめり、おい〳〵所持の主をたづね求めて、しるしをくべきなり、

寛政五年癸丑十一月三日辰刻記之源尹祥

○京東山禪林寺末寺瑞泉寺には、太閤秀吉公所持の品々多く納めあり、朝鮮征伐のころの書簡もありといふ、角倉與市が納めたりといふ、

○筑前國箱崎の戒檀寺の什物に、菅公の御衣および眞跡ありといふ、見し人の物語なりとぞ、

○エレキテールセーリセイトと云て、玻璃車を轉して火氣を發する

器あり、只わが國にては、蠻國の奇器を尊信する事、實に過るがゆへに、この器をも、ことにもてあそぶなり、いま琥珀のちり吸ふをばあやしまずして、この器をあやしむぞおろかなる、總て火氣はものをこなたへ呼ぶいきほひあり、滑なるものをいく度もすれば、おのづから火氣を生ず、その火氣ものをよぶゆへにかろき毛羽なんどをすふなり、凡のもの火氣のあらざるものはなし、水中とてもみな火氣はあるなり、その火氣に感ずれは忽ち應ず、ゆへに温暖の氣いたれは、衆陽のために其一物の火氣長せず、ゆへに感應なし、或は空船なんどいひて、空氣に乘する船ありといふ、未だ蠻書には見へずとなん、いかのぼりの大きなるには、人其絲によぢなば空中へものぼるべし、何の用にもたゝざるべし、

○リヨクトホンフなどいふは、活るものを死活する器なり、これは予

こゝろみ製したり、萬物みな氣をうけて生活す、玉壺中へすゞめなんどをいれて、その壺中の氣をこなたへひきどれば忽ち死す、その氣をもどしいるれば忽ち活す、これまたあやしむべき事もなく、口鼻をおほへば死するとおなじ道理なり、風車なるものあり、油をしめ米をつく、その器精巧にあらざれば、風なきほどの日にもいかで廻るべき、好事のものはむかしより考ものずるなり、しかるにことし魯西亞へ漂流せし人にたづねしに、風ある時はまはり、風なきときは人その車を轉ずと云しとぞ、たゞ風吹日に、轉輪の人休息する事を得るのみなり、こゝに至て信ずるの實に過たるを人〳〵わらふ、

○相撲國のあたり行とき、富士をみる、高きものゝ類ひなきは、ふじにてこそと人〳〵いふをきゝて、

いや高き君か恵にくらへては、塵ひちなれや雪のふしの根、

となんよみぬ、凡のもの、聞けばかはぞ、さして思ふものなり、喬き木といへば、かはぞにあらんと思へば、これもまたおもふには遠からざるなり、只ふじの山は、雲いとおはひたるに向ひて、この雲晴たらば、かしこに富士のいたゞきを見んとおもふに、雲はるればおもひしよりは、いとたかくそびゑて見ゆるなり、そのゝちの日もまた雲おはへば、こゝに項を見んと思ふが、また晴ればおもひしよりも高くなん、總てわが量よりもはるかにたちまさりたる人の慮は、みなおしはかるよりもはるかにたがふなり、

英雄之胸襟前例度

○君子は幾を見て立、日の終るをまたずといへり、わがくにふりにては、その職に居、その任を負へば、斃れてのちやむを忠とすといふは、其任の大小、職の輕重をしらざるゆへともいふべし、斃れてやむべしとはたれか思はざらん、されどすゝみて忠にあたり、退きて忠にあたる事のあれば、進退行藏はよくおもひわきまふべし、榮利にまよへばその當否をしらず、たゞ幾を見るてふ事、克己のうへならではいかで見へん、只退きてその命にやすんじぬるとて、國家の亂階あるべきをも、命にまかせ退きてやすんずるてふは、いと不忠の心なめり、たとへば親のやまひを得て死するを、いかに命なりとてやすんずべき、たまよばひしても、その生をねがふにあらずや、これを至情といふ、只進退行藏ときをうるはその命をしるとても、杞憂を抱くの情は、退き藏るゝの時とても、寢食の間もわすられじ、さるをわれこそ榮利をすてゝ退きたりとて、國家の事はよそ事の樣におもひぬるは、いかで進退行藏の道を得たりと云んや、幾をしらずして斃るゝにもおとれり、

進退行藏古聖人モ之ヲ重ンス

文明國政不家ノ本

○あるやんごとなきかたより、こたびいづ方へ養はれ侍るなり、養子としてその國家をおさむるは、ことにかたしときゝおよびぬ、予はすでに養子として行たる身なれば、その艱難もしるべし、垂教せよ

食寶無差
之天下之言處世之不外子矣

との事なり、そのこたへに、養子實子とわれよりへだてなば、人もおのづからへだつべし、養實無差別の一言の外、言べき事はなしといひやりぬ、

○びいどろ鏡を製するに、錫を紙のやうにうすくしたるに、水銀を手にてぬれはよくつくなり、びいどろをうへにおけばつきてはなれず、うへにおしをかけて、日をかさぬれば、かゞみとなる、

○予三十歳に成し夏、大任を蒙り、乘輿して出れば、あるはこし馬をとどめ、その位〳〵に應してことにうやまふなり、はじめはわが不肖いかで其敬禮をうくべき、その敬禮する人は、いかほどの才德あるをもしらず、撰擧するの意もなく、いかでうやまはるべきと、輿中にひそまりて、やすき心もなかりき、一とせも過れば、其心なきにもあらざれども、この人はうやまふかたちのうすき、予をうやまふにはあらず、予が職は公の職なり、公の事をうやまひ侍らざるに當れりなどしるゝて理をつけて、思ふ心生ず、これ驕惰の生ずる幾なりと、直に思ひかへして人にもかたり侍りけり、相國寺常長老がそれをきゝて、文かきておくりける、予をほめたる事なれば こゝへ省きぬ、

是處世針灸

○天に安んするといふは、心のおよぶたけ、力のつくるほど、つとめおこたらずするを、天に安んじぬるとはいふなり、いまやうの人醫をゑらまず、病者の介抱にも心を用ひずして、その病の愈るを天にまかするは、自ら棄るなり、されば天にまかせて、命に安んずるといふは、心にくるしみもなきやうにおぼゆる人もありなん、それはしら

ざる人とも云べし、顔子の樂しむところは、わがしらざるところなれど、只天にまかせぬるとて、乾々としてつとめておこたらず、心をくるしめ、力をつくす事なるべし、唯心を榮利のために用ひず、非道にくるしめず、力を正道に用ひて、盡すのみの事なるべし、獨善の人の山林ににげかくれて、天下の事をよそ事におもふが如きは、鳥獸の類ともいふべし、

○いま畫といふものは、浮世繪なりといふは激論なり、されど唐の十八學士の圖をみて、そのころの服をもしるべかし、かの春日石山の緣起、年中行事の畫ありて、その頃〳〵の衣服宮室武器、その餘の調度の製をもしるべし、しかるに畫は玩弄のものと成下りしより、芳野のけしきゑかくも、其眞の山水にはよらずして、瀧なきところへ瀧をおとし、松なき山にまつをかいて、只彷彿たるかげをゑかくがでとし、また今の世のけしきゑかき、すみ田川の遊舫をうかめ、梅やしきのはるのけしきなど畫くは、浮世繪のいやしき流のゑがくところにして、かけものなんどにもたゞ大體をのみ畫くなり、かゝる風俗の好尚によりては、いまの姿は、後の世何をもてしるべき、山水とてもすでに眞の事にはあらず、涙に兎をゑがき、牡丹に獅子を畫くなど、たとひ筆力不凡、彩色目をおどろかすとも、一時の玩弄にして、畫の畫たる本意はうすかりけり、それよりして唯一點の墨をちらしたるを、眞の山水のけしき成とて、いと高き事とは心得るなり、されはこのうき世繪のみぞ、いまの風体を後の世にものこし、眞の山水をものちの證とはなすべし、蠻畫などは寫眞鏡にうつして、そのまゝを畫けばこそ、横文字しらざるものも、その畫によりてその製度をも察すべけれ、いま又唐畫といふものありて、かの沈南蘋の

寫生などをよき事と心得て、山水人物のさだにもおよばず、只かの國の事のみかきて、富士のやまかくことともせず、櫻花かく事をもせざるつたなき畫は、玩弄のまた次なるものともいふべからん、

○癸丑十一月はじめ、木並撿校といへる盲人のもとへ盲人五六十人來りて願ひ事あり、そのねがひかなはぬを恨みしや、ある夜その盲人どもまたきたり、かの家をうち潰さんてと、窓の格子など引やぶり、大に騷擾に及びたり、みなめしとらへぬるとぞ、むかし山坊主のさはぎしためしいあれど、盲人のかはどに騷擾したるためしはあらじと、人〳〵笑ふ、

○硝子は鉛百目、焔硝三十五目、石八十目、和らかになすには、石七十目より四五文目もましいる、白硝子には、とたん二文目五分ほど入、鉛を融化し、とたんを入、その鉛のかすを竹匕にてさり、鉛をまた水へ入、それよりまた融化し、石の細末にしたるをいるゝ、このときは文火をよしとす、それより武火にしてゑん硝を入、よく煑たるを水に入、それより臼にてつくなり、細末にしてこたび煑る時い、ゑん硝また少し入る、黃色なるは紅からを百五十目程入、鉛二貫に紅から百五十目也石の粉をましゆるときいるゝなり、青色なるは赤かねの粉をくはゆるなり、目方は鉛二貫目なれば三十目、いろこくするには二百目もいるべし、紫には紫ゑす八十目も入、藤色にはゑす少し入るゝなり、るりいろには紺青一斤も入、青ゑすにてもよし、この焔硝火に燒てとびはぬるはあしゝ、硝子のかまは、あら喜田といふ土にてぬりたて、火氣をうるところへは、尾張燒の瓶のわれたる粉を入て塗なり、蠻國にては、硝子を用ゆるは陶器なんどはわれぬれは其まゝ捨べし、硝子器はまたもとへいれて吹直すべし、ゆへに貴ふなり、わが國にあるびいどろは、ことにうすく紙の如くにして、

その用はなさず、磯器にもおとれり、いかにも寒きくにの山林中にて、かまどを大きくして、濱邊にあるところの石もて製しなば、蠻國にもおとるまじけれども、それをなすものなければ、唯童子の玩器となりて、むなしく鉛などを費す事とはなりぬ、

○痘瘡は疫なりと福井立助が言しよし、されど其の說おこなはれず侍りけるが、ショメールといふ蠻書に、痘は疫なりとて、專ら解毒の治法を記し、シャクタクより血などとる事をしるすとぞ、これをもて福井の說の證としけるが、あるものの前々太平記を見て、主上御患痘の條に、その頃の名醫和氣氏等の痘說をあげたり、是にも疫なりといふ、これをもてみるに、今の治療はいかゞあらん、痘神をまつるなどは、疫神に類したる事にて、古きならはしのつたはれるにやあらん、痘の治療はいまだこと〴〵くひらけざるにや、凡そ治療てふものも、今に至りては少しく開けぬ、温疫論などいふものたへて信せず、疫をもみな傷寒の治療をはぢこしたるが、かの立助京より徵されて官醫に列し、この事となへはじめければ、それより吳氏の治療さかんに成にけり、飜胃など云やまひも、いへがたしと人〴〵云しが、この立助ならびに其子主一郎はよく治せしなり、齧病てふものは、書にのみありて、江都にては人しらざりけるが、これもこの父子來りて治療せしにぞ人もさとりける、齧病は多く肝痰のやまひなどに混して、俗にいふはやうち肩なんどいふなり、支飲といふやまひも、こゝらにては人しらず、肺氣腫滿などいふに混ずる成けり、たゞ醫はよくその規矩をたてゝ、古人の藥をそのまゝに用ゆるを貴ふ事なり、しかるにいまは虛腫を見て、その人、心を配る事多けれは、思ひて脾をやぶる、さらば歸脾湯を用ゆべし、その歸脾湯に何々

を加味して通氣をもとめ、何を加へて欬をとゞめ、瀝吐あれば何を減するなどいふことく、はては其本方をうしなひ、また何々を兼用ゆるなど、其こんざつする事かくの如し、歸脾湯の龍眼肉をさり、建中湯の飴をされば、こゝにて古人の本意にそむきぬべし、其本因を見すして、枝葉のやまひに一つ〳〵其治方の藥を加味し、つぬには丸散をも用ひ、兼用の煎湯をも數々つけをき、はては一日のうちにも二三方をかへ、只その急なるを治するなんどいふ俗醫あはてかゞへがたし、こゝに人參てふ藥あり、むかしの方に人參をもちゆる意をもてみるべし、白虎湯石膏湯の類にも、伏苓飲の類にも用ひて、たゞ今いふ補劑にかぎるにはあらず、ことに四君子六君子とて、人參をもその君子のうちにいるゝなり、いま一分一厘用ひてその効功あるやうに覺ゆる奇効ならば、將軍の名をつけぬるとも、君子の名はつけがたし、すでに朝鮮人は人參を茶の如くにせんして、來客に飲せしむる事もありとぞ、いまは一分の人參を、一りんの增減にても、その功の多少をかうかへぬるなり、ことに今の世にうりかふ人參の高價なるは、みな糟粕に類すべし、われゝ人參のあはざる性なり、少し用ひても上昇するなどいふ愚俗もまた少なからず、されどもこのころは人參の迷ひもやゝとけたり、すでに享保のころ、朝鮮國の人參をこの地へうつしうへ給ひ、つぬに今のごとく繁茂したれども、用ゆる人すくなかりけり、四五年のうちに開けて今は多く用ひて、醫のうちには朝せんより來るといふ參をば、しぬてどゞめて用ひざるものもあるぞかし、

凡の情、求めかたきものは、もとめ得たく、求めやすきものは、もとむる事をおもはず、享保の　御惠をもて、かゝる良藥もこの

地に産する事に成たりしが、廣東人參といへるは、人參にてはなく、三七根なりといふ事開けたりければ、廣東人參うりかふ事を禁せられにけり、此地に産する人參こそ、尤たうとけれとて、その參をうり出すところなどさだめられければ、かの摧にちかくありけるにや、愚蒙の民はわが利をもとむる心をもておしはかりて、この參をもとむれば、公の利あるをはからせ給ひて、廣東を禁せられけりとうたがひ思ふにぞ、いよ〳〵はじめにいふ朝鮮とてうり出す參をもとめ、廣東をもひそかに求めてやまざりけり、いまはまたこの迷ひもつるに悟りて、廣東なぞ用ゆるは、ことにつたなき醫なりとて、互ひに笑ひぬるやうにはなりにけり、ことにかの國にては、我國の參をいとたうとみ、年〳〵に多く求めてかへりぬるにぞ、いよ〳〵わが國に

之時既に中○隱矣

て用ゆる事とはなりぬ、

○學問は只正心脩身治國安民のためなり、今は多く名利の具となれりけり、かの已がためにするのたぐひなり、されはこそ、經書に、わが意をもてみだりに註解をなし、門派をたて〻新奇を唱ふるを是とするは、本意いかゞあらん、仁齋徂徠の類は、いかにも一時の豪傑にして、その說ところ名利の上に走るともまたいふべからず、たゞ今の學者は程朱の藩籬をもうかゞはずして、みだりに程朱の道をそしり、博問多識、徂徠仁齋にたへておよばずして、はや此二子をもそしるぞ、輕薄の風察すべし、その門弟も只其師をゐらぶべきをも思はず、新奇を高しとして信ずるはまたあさまし、ある人予に尋ねしに、闇齋の學は程朱の學なりやと、こたへていふ、闇齋は程朱の學なるべし、いま闇齋流などいふ學は、只固陋にして四書小學近思錄の

みよみて講釋をまなぶなり、講釋を學問の一科とせしはいにしへは聞ず、博く問ひ博く書をよみてこそ、世の治亂の機變もしり、經濟の才もいで、所長にしたがひてわが器をなすべきに、只一事に拘りたるのみか、講釋を習ひ覺ゆるなんどはいかゞあらん、しからば予は何を貴びぬるにやとたづねしゞ、堯舜孔子のみちを貴めども、經傳もその注解によらざれは味ふ事もかたし、何の注家にしたがふべけれとなれば、予はおさなきより程朱の學をまなびしにぞ今にかふる事なし、見識ありてしかあるにはあらず、唯うたがふ事もなければ、かふべき念もなし、況んや程朱よりして今に至りては、いかほどの年月を經たると思ひ給ふや、すでに丘瓊山眞西山の徒の如き名儒賢者少しとせず、されどみな程朱の學をば尊信せられけり、されば論定りたりともいふべからん、徂徠なんどの徒、才は高しといふとも、宋元明清の名儒賢者にくらべなばいかゞあらん、只年月多く此流派に一定したると、よき人の多く尊信したると、尊信した る人の多きとをもつて考へぬれば、程朱の說を信ずるはあやまり少しといふべからんか、徂徠仁齋も一時の豪傑にて、わが輩またおよばざる事なれば、この二子をもなぞて批判すべき、たゞよくおもひたまへかし、聖人に親炙する門弟多きが中に、たゞ曾子こそ一貫の語をきゝて、唯々としてうたがはざりき、まして聖人をさる事數千載、古しへの人におよばざる事もまた遠し、數千載の下より程朱の徒いでゝ、聖敎をとなへ給ひければ、これによて論さだまり、また多くの年を經たれど、みな尊信ことにあつく、そのみちを用ひて國おこり、その道をうしなひて國亡ぶ、されはその見識を古人に讓りて、わが輩は只その下に居てこそ學ぶべけれ、よむべき書は經傳諸

予何といふ事もなく、博く見て問見をひろむべし、かの駁雜とて笑ふめれど、聖經のみちにおいて駁雜ならざれゝ、あへてきらふ事にいあらざるべし、かくいへど、予は文つくる事もせず、詩つくる事もしらず、點なき書はよむ事かたし、されど左右にすゝめて書をよましめ、かきしるしたき事は口占してかゝしめぬるなり、是にて足れりとは云かたけれども、才のつたなきはせんかたなきゆへなり、

○予の願つゐになりて、大任をゆるされたるが、五日六日の間は、門前車馬ことに多く、これまでの事を謝す人もあり、または賀するもありて、さま〳〵成けり、かくてはいかゞ爵羅をもふくべしとて、公の有司について、人〳〵賀しにきたりぬるは、いとかたゞけなけれども、いまの職にては、來客の事にあづかる人をも減したれは、失敬の事あらんをおそるゝにぞ、賀しにきたりぬる事をもいたく辞しぬるとはいひぬ、夫よりしてやうやく減したり、そのときも思ひし、越の大夫が船をうかべて去しが、かれは功をとぐるの賢才なれば、人もさぞおしみてしたひ來るべし、いかに有司にたよりて來客を辞したりとも、漸く減しぬるにも至るまじ、五湖にうかびしはゆへありともいふべし、そのゝち賀辞はたへけるが、またその始年大暑大寒などのせつ、ことゝふ人またありければ、みな〳〵かたく辞して、やう〳〵いまに至りて爵羅もふくるやうには成りぬ、

○旱すれば毎日田のくさを鍬もてかきならし、おこたらずし侍れゝ、その草むれて夜のうちに濡ひ侍るなり、いかなる大旱にもいねのかるゝ事はなしといふ、いま伊豫の松山領の司農の小吏農事にくはしくして、是を民におしへし處は、つゐに大旱の患まぬかれしといふ、

○今の世は、風俗花やかならず清らなる事を好む、かの高上に成あがりたるなり、明ぼのしぼりとて、紫又は紅にてはの〳〵としぼりあげし、ちりめんなどをもてはやす、其まへに板じめとて、白く摸様を出して、べにやむらさきもへぎなどに染しものはやりたり、紅梅おり山まゆ織などいふものも行はれぬ、又女の帶なんどにい、きらめきわたりたる金絲などあるはきらひて、カベチョロと名つけて、ちりめんの絲にて織いでたるが、金絲も多くあれど、はなやかならずきよらなるさまなれば、いまことにもてあそぶなり、二重どんす桃やま織などいふも專らおこなはれぬ、十年ばかりまへは、かんざしなんどもたいまいにて、希代の細工をつくしたり、一ッのかんざしを高料にてもとめうるなり、其後禁ぜられて、いまはそのころほどにはあらずなりぬ、かうやうの事は人の目にふれぬる事なれば、かくにもおよばざる事と思ふべけれど、またのちの今をむかしといはんころ、こうかへのひとつにも成なんとかい置ぬ、予いまだ四そじにはたらねども、女の髪のかざり、衣服のさまなど、いつのころよりはやり行はれけるといふ始末おぼへしも數〳〵なり、びんさしてふものはなきが、くじらもてつくり出し、今は白かねたいまいなどもてつくり出せるなり、其外うつりゆくこと〳〵かぞへもつくすべきものにはあらず、

退閑雜記卷之二

○去年さつまよりつみ來る鮑の貝を、多く求めたるものあり、何になすと人〳〵うたがひしが、そのものの鮑のかいの穴を昆布にてふたぎ、木にて蓋をとゝのへ、かの淺草の市とて、としのくれにたつる市にもて行て賣らんとす、その日いとまなかりしかば、人にたのみてうり給はれと云しかば、其人市に出てうらんとするに、何といふてうるべきをもしらざれば、貝燒の貝といひてうるにぞ、誰かへりみるものもなく過行て、日の半するころ、はづかに五つ六つうりたり、さるにかの發意のもの用事すみてこゝへ來りとひしに、しかじかのよしいふ、かのものきゝてはゝゑみつゝ、賣やうこそあるべし、かい燒の貝なぞいはんに、この人の群集してさま〳〵のものうる中

に、いかでたちとまりてかふべき、わがうるを見給へとて、いと高く聲揚て、はや鍋〳〵と云たれば、こはめづらしきとて人〳〵たちより、目たゞくうち百も二百もうりたるにぞ、其價をつゐに倍增してうるに、かい來る事おびたゞしくありしとぞ、すべてこの市はことに人おほく出れば、手桶などいふものも、手桶〳〵と云ては誰もかへりみず、さはら〳〵とたかくよべば、さはらといふ木にて製したる手桶といふ事しるもしらぬも、其高聲の勢ひにつれて、立よりてかいもて行なり、そのみちによりて、才もまたかはりぬるものなめり、

○ある老人がみち行に、狐の皮を買もとめて、只手に持行んもいかゞなればとて、腰にまきて其上へ羽織きて、日のくるゝころ行しが、いとつかれたりとて、道にある駕籠をかいて、わが宿までかきもて行よとなん云ける、かでかく者いづくぞとたづねしかば、稻荷橋まで行よと云にぞ、すみやかにかきもてゆき、其ところにてかておろしたりければ、老人鵝眼を出してちんをやりけるに、その駕籠かくものたゞ地にふしておきず、いかで其賜ものをうくべき、只われらの息災延命を守り給へといふにぞ、何てふことをわきまへずひたすらに其價ひをやらんとせしかば、ふたりとも逃さりぬ、かの老人家にかへりて、奇成事とてうち物がたりしけるが、羽織のひまより狐の尾出たりければ、俗にいふ稻荷明神にやあるらんとおもひけらし、ことにいなり橋までかでかけよと云しも、つき〳〵しかりけりとて人〳〵笑ひしとぞ、

○同じとし正月十日、北西の風いとはげしかりけるが、晝過るころより麹町となんいふ町より失火して、忽ち芝の新錢坐なんぞいふと

ころまでやけぬ、諸侯の邸、類火に及べる凡五十餘ヶ所とぞきこへし、奉書火消と名づけて、その延火に至り、臨時に消火の役を　公命をもて諸侯に下し給ふ事あり、その　命を蒙りし人も十四五人なりけり、夜の八つ過る頃に鎭火しぬ、ある人のいふ、江都に火災なくばなべてさぞ奢に長ゞぬらん、京大阪なんどの町々は、すでに調度などもさま〳〵風流をなし、家のうちにもかけ物かけ、はななど活たるはいと多し、江戸の町々富たるは猶質素にして、おひつぐらなどいへるものかたはらに出し、ゆたかなるは將棊なんどするものもあれど、箱のうらに紙はりて盤とするなど、もの〳〵奢なきは江戸の火災によると云しなり、ことに此大都會、たびのやうなる火災時々なければ、いかで金銀の融通しなん、肅殺なければ發生の氣も催さじといひしも知言なり

○かの南蘋なんど、畫にいとくはしき胡粉にてかくが、我國にて眞似するに、およばず、長崎の熊非とかいふが南蘋に習てもその胡粉の製は云さりけり、後に南蘋唐山へかへる時、其胡粉をおくりたりけり、熊非よくみしが唐の土なり、故にまた唐商に云て唐の土と見へぬ、製しかたはいかゞなすぞとたづねしかは、また來るとしその唐商きたりて、南蘋に問たるが、よくぞ唐の土とみしなり、其うへは傳授すべしとて云てしたりとぞ、其製をきくに、唐の土と豆腐をいれ、水を和して陶器にてよく煮るなり、さて其豆腐をあぐれば唐の土のあくみな出て黑く成なり、殘りたる唐の土をよくすれば、いと細かにしてうるはしく、いかなる細畫にてもなすべきなり、南蘋が黑き蝶を畫くに、手なぞにつけなば、つくべきとみゆるやうなる墨色あり、此傳は象牙をやきて粉にして、其畫のうへにつくる

なりとぞ、このふたつをばことに秘すとなり、

○銅板鏤刻、蠻製にあれど、我國にてなすものなし、司馬江漢といふものはじめて製すれども細密ならず、ことにいとといたう秘してわれのみなすてふ事をおふなり、さるに備中松山の藩中にこのころなすものあり、殊に細みつ蠻製にたがはずとぞ、予もむかしこゝろみしが、蠻書などにあるを譯させてこゝろみしによからず、人をもてかの士へたづね問たるに、銅板に炭の紛をもてみがき、その板を火のうへにのせ、せしめうるしといふを、ことにうすく銅色のみゆるほどにぬるなり、さて其板を三日ほどかはかし下繪かきて、はそきたがね又は針なんどにて、其うるしをほりうがち、日のあたる所へ出し、藥を筆にて三四度もつけ、紙に酢をひきてその紙をもて銅板の表にあて、一夜、屋の下などへ置、あつき湯をもてそのうるしを去て墨もて摺なり、

藥方

墨は鹿角象牙などを燒たる其粉に、ゑの油を交、其銅板に糊うすき紙をもてその墨をよくぬぐひ、猶手にてもよくその墨をとれば、墨そのくされたる畫なんどの方にのみのこるなり、紅毛の紙をよく水にて濡はせ、またうるはしはさる紙と二つかさねあはせて、銅板のうへにのせ、しめ木にてしむるなり、かの士の言には、墨は油煙を用ひたるがよしと云、ボイスショメール なんどにも、銅板の製す事しるしあれども、かの蠻書の一失にて、その簡要にする事は、ことに略して書をけば、其法による事あたはざるなり、せしめうるしつくるは、かの士の考なり、白蠟に松脂を交へてつくるは、蠻書にものせ侍るとなり

○リユクトホンフてふものは、名のみ聞へてその製見たるものもなく、蠻書中たま〳〵あれ共、製もまたつまびらかならず、こゝによてこゝろみに製するものあれども、理も明らかならざれば、巧思もまた盡さず、今年其製成就す、氣を吹入て生物を殺さんとす、故に死活をなす事あたはざるなり、凡萬づの物、此天地の氣を得て生し、うしなひて死するの理は、誰々もしれる事なり、口鼻をおほひて天地の氣をたてば死するもおなじことはりにして、奇器てふものにはあらざれども、幼童など見ては奇成事のやうにおもふめり、其器成て彼忠朝朝臣（松平下総守）などへみせぬれば、ことにおどろかれて精巧をほめ給ひけり、水中の魚ば、水を呼吸するとのみ思ふなり、水中の氣を呼吸するなり、これらも其器中へ水をもふけ、一小魚をいれて、氣をとなたへ引とれば、水はありながら、水中の氣たゆるにしたがひて、忽ち魚死するなり、又氣をもどし入るれば忽ち遊躍するなり、或は酒などいれて氣をすへば、酒ことに淡くして水の如くに成るなり、其器はことにたくみなる物にはあらず、もとより無益のものにして、もてあそぶべきものにもあらず、

○大阪に前川巨舟といふ印石など彫ものあり、五分四分の紙に千字文をほりし、近き頃三寸程の墨本に、蘭亭帖義之の書を縮寫して彫出たり、人〳〵おどろく、また此ころ猶ちいさき紙に、愛蓮說を書て墨本にして出せりといふ、木にほりたるにもあらず黃蠟石なり、うすき紙をゑらびて、よくうちこみて摺あぐるといふ、いと奇なり、その蘭亭帖の文字、筆意體裁、いさゝかもたがふ事なしといふ、

○には鳥の卵、火氣をもてあたゝめなば、生すべしとおもひて、昇降水の球をにはとりのとやにいれて、その暖氣のはぐをためし、ひとつ

の箱をしつらひ、中の程を板にて仕切、うちに綿など多く入、上下に爐を置、其わらのうちへ卵と昇降の球を入て、火氣の強弱なからしめける、しかるに十餘日も經にけるころ、まづ一つうちくだきて、そのはどをみるべしとてわりけるが、いさゝかくされもせず、鷄の子そのまゝにて、かしらを足のあいだに入て、目もいまだあかず、尤息もかよはず、毛は大がいにはへてありけり、後にきけば、琉球にて鷄卵を蒸して生じさせぬるといふ、去年より薩州にても、其法を習得てなすといふ、色〳〵尋ねしかど、くはしくきかざりしとて、かの法はかたらず、ショメールに枕のやうなるものに、鷄の糞と毛をいれ、玉子をたてにして、ほそきかたをうへになし、又其まくらをうへのかたにもをき、あたゝかなるところに置、三日過て其卵を上下をまはしをき、廿一日めに、卵をわりて鷄を出すといふ、并にショメールが考には、火の勢ひをもて卵をも生じぬべしとのみ書をけり、

○三十とせも過にけん、八寸摸樣とて、女の衣のすそに、八寸ほどにもやう染ぬひなどしたるが、ことに流行しけり、それより五寸三寸となりて、いまは、ふきもやうとて、衣の裾にいさゝか摸樣つけたるが多し、古しへのは、縫もそめもいまのやうに巧にはあらず、いまはけものの鳥なんどは、生たるやうに縫出し、よりぬひ、からぬひ、なんど云て、手をつくすことゝは成にけり、

○甲寅夏四月十日、細川與松の曾祖母清涼院死去せられたり、久しき病にて水腫などありける、九日には本家齊茲朝臣（細川越中守清涼院の甥なり）を年始の賀に招かれたり、さるに朝より老女など呼て、けふは例のでどぐ賑やかゝして祝ふべし、久しき病にてけふは終りをとぐるなりとて、齊茲朝臣へ云おき給ふ事などこまゝと書たまひ、靈感院

先々細川少將重賢朝臣の書れたるものなど取出し封しおかれ、手もとにありける金子を出させ、封しさせられて、とし久しく仕へ給ふ老女へやらるゝなど書給ひぬ、齊玆朝臣も來られければ、種々の祝ひ事ありけり、わきて齡も七十あまりに成給へは、尙齒會催し給はんとて、年頃ものすかれたる、たばこ盆、硯箱などのありけるを取出し、祝ひおはりてのち、その二しなをは、齊玆朝臣におくり給ひぬ、夫よりしてさま〳〵のたゝれでとなど、いとゝいとう樂しきさまにて云給ひけれは、おもと人はじめ、なきかなしむ心はあれども、あまりに事かはりけれは、涙こはすものもなかりけり、それより菓子などもくひ給ひけるが、常の如くなりけり、さて合掌して念佛となへ給ひ、つゐに遠去し給ひける、それとても、いつ息の絶給ふやと、かたはらにみなく〳〵つきそひたれど、いさゝかかわりたる事もなく、はじめより半眼にして、死し給ふのちもかはることなし、息の絶給ひしもしれざりしとぞ、よく聞し人語りぬ、

○慈惠大師の猿の七首の和歌のこゝろを畫きて、そのうたをかいつけよと、ある人のこひしかは、かのうた七首をかきて、うのすへに、

あふくへき道はさま〳〵見聞ても、學ふ心の立さるそうき、

とかきぬ、

○韓退之夜歌、靜夜有清光、閒臺仍獨息、念身幸無恨、志氣方自得、樂哉何所憂、所憂非吾力、いとおかし、

○安祥院殿の御別當普門院、わが宿坊東圓院をもて、かたく乞たりし事あり、尤他にみすべき事には露もあらずとて、ひたすらに云こしけれは、匣の上書を書て、別に左の事をかいておくりぬ、

安祥院殿は清水中納言殿の御生母にて、さくら田の御屋かた

に住ませ給ひける、としごろ和歌を好給ひて、月の夕花のあしたに、折にふれ時につけつゝ、詠出たまへるも少なからざるよし、寛政改元のとし、いたつきにかゝらせたまひ、つゐに逝去し給ひけるときも、その御言の葉は烏有になすべしとの給ひけるにぞ、今まで世にしれる御言のはもなかりしは、いとおしみ奉るべき事になん、しかるに此千首の御うたは、先に閑院宮へ御點を乞はせ給ふに、宮殊に感じ給ひて、既に御筆を染らるべかりしに、其かくれさせ給ふ事、みやこへ聞へしかば、やがて此巻をも此地にかへし給ひぬ、されば、こそのこり侍りて、そのきみのおもと人ひめおき侍りしを、東ゐい山の普門院といへる、かの神位を守護なせる人のかたく乞うけて、安樂心院の宮の御覽に備へしかば、いとふかく感しおはしますあまり、その巻にあるところの和歌をもて、こゝろの月と名づけさせたまひぬ、普門院ことにありがたくおぼへて、其名をまた匣のおもてにかいつくべきよし、我しれる人をもて、わがもとにひたすらこひもとめ侍りぬ、ひらきみるに、まことや和歌のうらの明珠とも云ぬべく、なみ〳〵ならぬ御言の葉に、くもりなき御心の月も、いま更あふぎしられ侍りて、實に感慨のおもひにたへず、泫然と泣くだりて、みゞかき筆をたつべくもあらねど、そのもとめにまかするつゐで、事のよしいさゝかしるしつけて、わがしれる人の許におくり侍りぬ、

○中寺村の常在院に、かの源翁の開基なり、爰に奈須野の狐狩の繪縁起三巻あり、予みしが、畫は中頃の町畫にしてとるところもなし、されど野太刀など持たる、みせさやなどさしたる、古風なきにもあら

ざれども、まためづらしくうつしものせん事もなし、行狀記といふ
ハ永亨元年にかいたるものにていと古びたり、されどもその文も
いとつたなし、天笠謂姐嬉班足太子成后などいふ文なり、されども
その寺の由來しるべきために、うつしをくのみ、

○しのぶ文字摺てふものは、諸說まち〳〵なれど、みちのくのしのぶ
郡より、摺出せるきぬなめりとかうかへぬ、東鑑にも安達絹千疋、希
婦細布二千端、糖　駿馬五十疋、白布三千端、信夫毛地摺千端と、む
つの國の產物を並べて、しるしたる事もあり、童蒙抄にも、もぢ摺と
は、みちのくにのしのぶの郡に摺出せるなり、うちかへてみだれか
はしくすれり、無名抄にも、しのぶ文字摺とは、みちの國の忍ぶの郡
に、みだれたる摺をこのみすりけるとぞ言傳へたる、顯昭も此二說
を信用せられしなぞ聞ゆ、

○丁未の年の春は白川に居たりし、その元日に、

家の名の久しき松も一しほのみどり色そふ春は來にけり、

武藏の丶春の惠もへたてなく、關のこなたに仰くかしこさ、

耳も今順ふとしの半越て、ひとたるみちにこゝろたてなん、

とよみたるが、其年の六月寵遇を得てけり、

○戊申の年の元日に、

君が代の春をむかへて天か下の、萬つの民と共にたのしむ、

とよみたり、亥のとしにやありけん、八月十五夜にうたよめと命せ
られければ、

四つの海浪たゝぬ代を池水の、最中の月のひかりにもしれ、

言の葉の道もひらけて明らけき、御代に相あふ望月のかけ、

となんよみてたてまつりぬ、

○甲寅白川にて稽古會し侍りしが、鹿聲遠近といへる題にて、

手枕にちかく聞しも山風の、たゆめは遠き小男鹿のこゑ、

秋田露

武藏野の惠の露はみちのくの、小田の稻葉の上もへたてず、

十五夜の月をみ侍りて

相にあひて光もこよひ陸奥の、空に名たゝる月をこそみれ、

十日あまりいつかと待しこの頃の、願ひも滿る望月のかけ、

代〳〵の人の詞のつゆの數〳〵に、磨きやそへん望月の影、

名にしおふひかりはいとゝ白川の、關ちの月に秋風そふく、

くもるをもいとふは常の空の月、滿ぬる名こそいかて藏ん、

愛そめし秋を思へは久かたの、そらに滿ぬる月を名たかき、

いつは有とわきて爽けき空の月、代々に陰ぬ影しるくして、

月に感ド侍りて

へたてなき月の光に向ふ夜の、心はひとつふるさとのそら、

せきの戸をさゝて靜けき月影を、みるも惠の外にやはある、

○十五夜に詩歌のけい古會して、題を得たり、

待月

圓居して共に樂しむおはしまに、名たゝるけふの月を社まて、

山家月

明らけき御代の光は柴の戸も、へたてぬ月のやまの隱れ家、

○奥州の鹽竈明神は、ことに此國にて尊ぶ事なれば、年毎に人をやりて、かの明神にまうでさせぬる例なり、こたび大任おはりて、いま領地に休息する事、いとかたゝけなさいはんかたなければ、猶又人をやりて、かの明神にまうでさせぬ、しかるに八月十五夜の月を、松島

にて見たきといふ、こは尤なりとてゆるせしかば、葉月の十日に此地をたちて行ぬ、こたびは鵜飼貴重か行なり、かの谷文晁は田邸より附來りしものなれども、かの邸の太夫に言やりて、温泉にゆあみの事をもて、是も同じく行けり、殊に谷氏は好古の癖ありければ、さま〳〵の石、または名どころの草木の枝葉など、探り求めてかへりぬ、古碑なんども摺もてかへりけり、予此兩士行とき、制令の事かいてやりぬ、其略に、公の御領はさらなり、他の封内等へ行て、いさゝか他の事をたづぬべからず、もし人より語り出すとも、余所事にしてきくまじきなり、馬夫なんどは、其領主の事などもいふものなり、相かまへて、咄しあふまじきをもて、いたく制しぬ、其外は、ふるきものゝうつしなんどするとても、しゐて求めなんどは、しまじきなりなんどいふ事もかいくはへぬ、鹽竈明神の神主藤塚某てふものも、風流をこのむものなりければ、松島の邊の山上へ伴ひ、笙横笛ひちりきなど持行て、月に乘じて吹あはせ興じゝといふ、何ぞ詩歌にてもよみじやとたづねしが、松しまといひ、良夜といひ、中〳〵言の葉もいでずと云し、げにさもありぬべし、いと古き琵琶の破損したるを、道の田舍屋にて見出しかいもとめたり、仙臺の辨慶堂の寶物に鈴木三郎の琵琶あり、見たりしが、その道にて得たりし琵琶の製につゆもたがはず、年ふりしさまもたかはず、いと希有なりとて、その琵琶を予にみせぬ、予ことに秘藏す、かの二士かへりて持きたるものは、石あるは松子、またゝ碑の摺たるなんどにて、風流に心なきものは、塵あくた拾ひあつめて持きたりしといはめとて、わらひあひぬ、

○茶抄けづるには、昆布五寸に砂糖五匁いれて、一時あまりも竹を煎

るなり、さてその竹を取出して、うらの方に油をぬりて、また火にかけてため侍る、そのためたるを手にておさへながら、水のうちへ入るゝなり、小刀にてけづり、其後はちいさき砥石もてすりみがき、また革のやはらかなるに、つの粉をつけて幾たびもぬぐふなり、青梅もて煑たる猶よし、

乙卯の元旦に

歡ひは桃の林に花の山、ゆたけき御代の春そたのしき、

二日に北小路へ參詣し侍るに、雪ふりければ

あふくそよ雪の白ゆふかけまくも、かしこき神の惠しられて、

○去年茶抄けづりて、その筒へ茶抄の曲はその直なりどかきて、ひたすらに直はなるにも用はなし、程能あれな庭のくれ竹、

とかきぬ、また一つ、

たけたかく丸くて長きその中に、はとよくふしの有ゝ此道、

○茶入てふものは日本の製なり、唐物といふは、みな我國にてつくりしにて、まことの舶來のしなは、藥または土などみるにも及ばず、忽ちわかるゝなり、高麗の茶はんもなきものと心得、唐よりきたる茶入は、なきものと思ひてみるべし、眞のかうらひ唐物なんどは忽ちわかるべし、其餘は京燒、萩からつにて似せたるものなり、燒たるところはいづかたにてもあれ、由緒たゞしく持居たる人なんど、ことにすぐれたるものなれば、その人を尊み時代を愛して、名器ともするなり、されども、こは一概の論なるべし、

○宇治川の橋の三つ間の水を名水とはいふ、こたび得てけるが一升にして四百二十三匁あなり、京にていふ、よき水などあつめてかけたるが、十匁こそおとりぬれと言こしたり、白川にある清水堀井の

水十數か所、その輕重をみたるが、本城中清水門の井は四百三十三匁にて、京よりこしたるとは十匁のおとりなり、三郭のあたりに笹原清水といふあり、名水といふ、四百二十五匁にて二匁おとれり、しかれども三つ間の水はるゝ〳〵此地へ來りたるが、かの水はことに清くこそ流るめり、この笹原清水は、沼のやうなるところへおちながれ侍るをくみたるうへ、はるゝ〳〵來りしにもあらざれば、笹原清水こそ、宇治にもまさり侍らんとおぼゆ、その餘、根田の清水は十二匁おとりたり、名もなき水は二十匁三十匁おとらぬはなかりき、

○繪なんどに用ゆる藍らう製するには、紺の木綿三尺くらゐを鍋に入、あくをいれてよく煮侍れば、淡たつなり、その淡をすくひあげて、器ものに入て後に、うへの水をしたみ、底にあるあいをほしてかためも侍れば、よき藍となるなり、尤あくをは度々水干してさるべし、その布は白き布となる、

○宇治の茶、末茶なり、製するには、春の土用より廿一日目につむをはつむかしと云、製するには、はちくといふ竹のあくにつけて焙爐にかけ、さましては火にかけ〳〵するなり、葉は三ッ出るところの左右をとりて中はとらず、上枝を上茶とす、地にちかき枝は下品となるといふ、不試、

○大學衍義補、臣按茶之名始見於王褒僮約、而盛著於陸羽茶經、唐宋以來遂爲人家日用一日不可無之物、然唐宋用茶、皆爲細末、製爲餅片、臨用而輾之、唐盧仝詩所謂首閱月團、宋范仲淹詩所謂輾畔塵飛者、是也、元志猶有末茶之說、今世惟閩廣間用末茶、而葉茶之用遍於中國、而外夷亦然、世不復知有末茶矣、とあなり、かの國にしては、好尙風流とも にかはり行なり、夏の禮殷にしは知がたく、殷の禮周にてはまたし

りがたく、王者のかはるごとに、みなあらためぬる風俗なれば、時々の事をのみ尚ひぬる風俗なり、わか國には、むかしよりならはせし事うしなはず、あらためぬる事は、きらふ風俗なり、されば漢唐の樂の今にたへせぬなんぞ、いとありがたき事にこそ、

○人形の顔なと胡粉にてぬるは、其胡粉製する法あり、まづ水を器に入て火にかけ、上は水をすてゝ少し殘し、又こと水を入てうは水をすて、はじめのごとくする事五六度、其水にて胡粉をときてつかふばかりなり、にかはをも湯にてとく、火にかくる事なしといふ、

○マンテイカといふ油は、接木さし木に用て妙なりといへり、

○陶物のかけたるをつぐには、たま子の白みに唐の土を交てつぎ、日にかはかすなり、玉子のしろみばかりにても、よくつくなり、

○墨は松煙にて造る、松烟と松のすみ三分ほど入、よく細かにしてにかはをもてねる、龍麝などを入て香を出し、紅を入墨の色を出すなり、

○卯歳の春三月、學校において尚齒會をし侍りぬ、七十以上の老人八十人、その年齡席格に隨ひて、頭巾杖などをやり、茶酒などをあたふ、音樂をなす、領中九十以上かねて扶持しおくものは、呼出しておなじく菓酒をあたふ、

我もまた三そし二つの春を經て、けふの筵の數に入らまし、

となんよみける、また會に出しものゝうたなどよみたり、そのうちおぼへ居侍るは、

政憲

杣人もよそに深山のくち木さへ、再ひ花の咲こゝちすれ、

なんぞゝとりく よみたり、數多ければ略しぬ、日かたふくまで、宴

興淺からずしてかへりぬ、

○尾州濃州の山の所在に、そよぎといふ木あり、則蘇木なり、そめものとす、

○燕脂は燕脂山より出る紅藍花なりとも云、又に紫根草をよくつき、汁をとり煮つめ侍るともいふなり、未試侍りしが、越の後州にツル紫といふくさの實あり、水にひたせば紅色を出す、綿にしめして乾かせは圓紫となる、舶來の圓紫に、草の實の皮かならず一ツ二ツあり、其實をとりてこの實にくらぶるに、いさゝかもたがはす、されば紫根にても紅藍花にてもあらず、此ツルむらさきにてゞ侍るめりといふ、紫極をもて圓紫をつくるといふ、紫針ともいふと南海藥譜にありといふ、ツル紫はこれなるへきか、猶考へ侍るへし、鹽を少しくはふれば、色ことによしといふ、圓紫は極めて鹽はゆきなり、酢を入れたるかた猶まさるべきか、製し見るにむらさきのいろに成

て圓紫とはかはれり、製しかたあしきかしらす、おとき草の花もてせいしたるはよく似たり

○チャンぬりてふものは、ゑの油をいかほどもつよくせんじつめ、それへ朱をいるれは赤くなる、ろく青を入れは綠となるなり、白きは唐の土なり、

○インベ燒は、そぶと云て谷間野地などに、かなけの出たるやうなる水をかけ、その器を松の葉などまじへつみ燒たつるなり、まつの葉などつくところ黃色に成とゞ、黑燒は、かも川の石なり、その石むらさきにして、水にはやくうるほふを目きゝしてとるとゞ、此そぶをこし、せんじつめ侍れば、ベンガラに成侍るなり、

○硝子の玉を製するは、たゞ硝子の熟したるをかねの上へとり、うへをまたかねにておさゆれば、ひらめになる、それを鑿をもて丸くか

く也、かきやうは、のみのさきをしかとあて、あとのところをつよくおせは忽ちかくるなり、かきたるあとを砥にてするなり、

○火または熱湯にて傷ひたるには、玉子のきみを紙よりにぬりて、火をともせは、油にへいづるなり、そのあぶらをつくれは忽ち愈、蘭これをヲハアロムとかいふなり

○唐本の帙のしんになる紙は、かの宿根稲根紙なり、こゝろみに製させ侍りたり、

退閑雜記卷之三

○呂氏春秋なんどの事を何くれといふも、わらはべの論にちかけれども、文王千里の地を辭して、炮烙の刑をやめんことをこひしは、文王千里の地をにくむにあらず、炮烙の刑をやめんことをこひしは、民の心を得まほしきがゆへなり、民の心をうれは千里の地を得しにまさる、これをもて文王を智といふなんどゝ説り、卷の十にや、以耳目所聞見、齋荆燕嘗亡矣、宋中山已亡矣、趙魏韓皆亡矣、其皆故國矣、とあなり、呂不韋の死せしのちの事なり、また趙襄子出圍賞有功ことをかいて、仲尼聞曰とあり、孔子沒し給ふのちなり、齋桓魯をうちし時、魯關內侯に比せんことをこひしなどあり、

○禮記內則篇に、玦捍の二字あり、註に、玦射者著於右手大指、所以鉤弦

而開弓體也、捍者拾也、韜左臂而收拾衣袖以利弦也、とあり、玦は、いまいふゆがけなり、捍は、かの鞆のたぐひなるへし、ともかけし古畫にあるところをみ侍るに、實に衣袖を收拾せしやうに見ゆ、

○本朝軍記に、矢のながさを、幾束いくぶせなどいふなる、禮得投壺篇の疏に、矢長五扶などいふ事あり、四指を扶といふ、廣四寸、五扶は二尺なりとあり、又內則に、雛尾不盈握弗食ともあり、握は、つかなり、

○文選の註に、堯設誹謗之木、今之華表也、以横木交柱頭、古人亦施之於墓とあり、方孝孺か弟、臨終の詩にも、華表のことあり、祠なんどにたつるは、墓にたてしよりしてうつり行けん、

○文選、七命劍の事を、希世の神兵といふ、呂向か註に、劍よく天下を威す、これを神兵に比すとなむ、劍術を兵法兵術といふも、よりところなしとはいはじ、されど兵士たるものは、劍をもぱらとして、いまのでとく鎗鐵炮なんど、さまくの事もなかりければ、概していつはものの、術と、劍をいひたるなり、

○云々は、文選にあり、銑か註に、云々謂辭多略而不能載也、といふは、今いふ云々の意に合へり、通鑑晉記、王若問卿但言爾々、註に爾々猶言如此如此、とあなり、是もよくあへり、

○續博物志曰、關東西風則晴、東風則雨、關西西風則雨、東風則晴、又曰、木與木相摩則然、金與火相守則流、陰陽錯行則天地大統、於是乎有雷有霆、水中有火乃焚、大槐人間往々見細石形如小斧、謂之霹靂斧、又曰、玉門之西有國山、山上有廟、國人歲々出礩數千、名霹靂、いづれもよくわが國にあひぬる事なり、越後出羽などの國、所在に霹靂石いとおほし、白石先生は何とかいひけん、又曰、暮鳩鳴即小雨、朝鳶鳴即大風、

○傳家集曰、今聞診御脉者常以十數、工拙相雜、是非混殽、發言進藥、更相

之宮殿下
之内閣往々倚伏前跋後疐左瞻右顧雖俞扁之術將安所施於是强者自專弱者附
附于氏聲

會雷同比周共爲誣罔不顧聖體とあり和漢古今情かわらずとやいはまし、これも深患の一ッなりかし、

○管子に、穀貴則萬物必賤穀賤則萬物必貴、となんあれども、商もの主と成り、かいぬるもの客とならば、穀貴きときも、萬物彌々貴く、賤くともまたいやしからじ、主客の勢といふも、用ゆるものゆるやかに、なすものときの二ッには過ざるべし、

○歸田錄曰、華元郡王(允良)燕王子也、性好晝睡、每自旦酣寢、至暮始興、盥(一作類)濯櫛漱、衣冠而出、燃燈燭治家事、飲食宴樂、達旦而罷、則復寢以終日、無日不如此、由是一宮之人皆晝睡夕興、允良不甚喜聲色、亦不爲他驕恣、惟以夜爲晝、亦其性之異、前世所未有也、故觀察使劉從廣燕王壻也、嘗語余、燕王好坐木馬子、坐則不下、或飢則便就其上飲食、往往乘興奏於前、酣飲終日、亦性之異也、とあれど、いまだれとはいひがたけれども、晝いねて夜おき居る人少なからず、前世いまだ聞ずといひためる、言のはにも愧おもふべし、おそくいねておそく起出はべる徒は、猶かぞふるにもいとまあらじ、國家閑暇、このときに怠惰しぬるよりの事なめり、

○朝せんにてあらはす忠州救荒切要に、松葉をくらふ法あり、それにいふ、松のはゝ食物にして、いのちをのぶるものなり、松葉をつみとりて、うすにてつけば、汁出て侍るを、その糟をとりあげて日にさらし、ふたゝびつきくだき、末となしてをくへし、食んとするとき、穀末米にも限らず、そば麥わらびの根の類、のりに用ゆべきもの なし、是をよつにわけ、まづそのひとつ分ののりをのみ、腸胃を潤ほし、その次に二ッ分を一ッにして、かの松葉末四合いれて、和してく

らひ、終りに殘る一ッ分ののりをのむべし、是を用ゆれば、米穀のかゆのみくひしよりも、氣力をまし侍るなり、もし大便秘閉する事あらば、あさの實を三ッほどくらふべし、救荒第一のものなりといへり、

○サフランの主治、血症にのみ用ゆるやうにおもふもの多し、蠻書中にあるところをもて、和解したるをみるに、胸及諸臓を治する事最妙なり、ゆへに咳嗽呼吸促迫、或は脇痛、癆瘵、咽喉不利、心悸怔忡、四支顫掉、眩暈、心志鬱結憂悶等の症を治、その外、疝癪、腹痛、血痢、諸臓の閉塞、黄疸、石淋、臓腑に堅癖を結成したる、血液凝沍、經閉難産、諸熱症に用ひいと効あり、殊に天行疫疾を治す、又痔疾を治す、外症のやまひにもおほく用ひ、諸腫、瘍のたぐひ、水をふくみて腫をなすものを治し、すべていたみを和し、嘔吐を定む、船暈には、小袋にいれて、心下にかくれば患ひなしとぞ、

○砂糖製するには、甘蔗を十一月半のころかりとり、車にかけてその汁をとり、甘汁五斗、石灰八錢ほど入、桶に一夜ためをき、あけの日より是を煎るなり、泡出れば皆とりすつ、それよりまた、かまどの口のかたにて火をたく、是を片焚と唱鍋のうちの泡かたよるを、一時ばかりも泡をとり、泡少くなる比火を減ず、桶にいれてしばしをけば、石灰みな底にしづむを、底より二三寸上つかたへ穴をあけて、汁を鍋にとり、麻布にてよくこすなり、こたびは、もろたきとて、火勢のかたよらず、行わたる樣にたくなり、ひさくもてかきまはし煮れば、にへたつ、泡いとかたく成りぬるを、鮹泡となんいふ、その泡いかにも細かになるを度として鍋をおろし、はだかやきの底せばき器にくみ入る、この器底に穴あり、木をけづりておしかいをくしばしして、さとう

かたく成りぬるころ、おしかい置し木をとり、薄木片をまゞかにいくへも巻てかい置、かくして廿日計も過て、清らかなる土を細かにして、水もてねり、一貫目ほどそのうつはの砂糖の上にぬりつけおく、土白くかわきたる頃、土を去れば、一二寸が間、しろき砂糖に成りてあるを、またとりて土をはしめのごとくし、いく度もかくすれば、みな雪の如き砂糖と成りぬ、この製は、福州の人紀州へ漂着して教へしとぞ、

○享保年中の典藥の抄書みたるが、そのうち又抄出す、

耳に虫の入たるは、酢につけたる生薑を水にひたして、耳にいれ歩めは、虫いづるとそ、

耳のなりぬるには、生地黄の根を火にあぶり、わたにつゝみ、夜ひる耳の穴へさすべし、

鼻血のたるには、鹽をいりて酢をそゝぎ、袋に入て頂上をのごふべし、又にかはときて、紙を方一寸にきり、それにつけて、ひたいの中ほどにおしつくへし、

頭のかさには、牛膝、くさぎの葉、にはとこ、等分にし、黒焼にしてつくる、

霍乱の甚しきには、おのこは左、女は右のくすしゆびの先より血を出して、その血を水に和してのむべし、柳の木をせんじ、又は、こまつなぎをつきて、汁をとり飲もよし、

大事の虫のおこるには、松やにを大豆ほどに丸くし、茶をころもにして、四五粒白湯にてくだす、

血のみちには、蜂の巣をやきて、酒にてのむ、ねぶの木と東へさしたる栗のかれ枝、等分黒焼にして、酒にて下す、

くちはめの喰たるには、あをしとゝを黒焼にしてつくべし、又つゆ草の花をすりてつくる、生なるいものくきを付る、百足のさしたるには、齒くそを付よ、はちのさしたるには、小刀にてさしたる所をなてゝ油をかくべし、犬のくひたるには、虎の皮を黒焼にしてつけよ、にはとりの羽をしろやきにし、又犬の尾をしろ焼にして付たるもよし、

馬にくはれたるには、馬ひゆをつきてぬれ、車前草をつきしぼりてつけよ、

きつねにまかれたる女には、杉の葉をせんじてあらふべし、あさの根を煎じてのむもよし、

うるしにまけたるには、栗の木の皮をせんじてあらふべし、かきしぶもよし、

盜汗には、大麥を白くして粉にし、湯にたてゝのむべし、

俄に死たるには、酢をわたにして鼻へしぼり入、

くさびらにあたりたるには、甘草をせんじて飲、魚にあたりたるには、何にても魚のいろこをやきてのむ、

水へ入て死たるには、あぶら毛のにはとりのとさかの、血をとりて口へ入へし、まこもの灰を身へぬるもよし、

不食の人に食をすゝむるには、生姜をうすくし、くるみをすりて、香色にあぶり、口にふくむ、又ずゞたまを細かにし、いりて能せんじのむもよし、

むせ病には、一の上の骨のはづれを七火やけ、それにても功なくば、十一火やくべし、

不食の人には、我くはるゝ物をくはする秘事なり、禁物いふはあし

し、以上右抄書

○硼砂てふものつくるには、明礬三百四十錢、芒硝百七十錢、鉛百三十二錢、水銀二十一錢を合してやき製すに、能出來たるは舶來の硼砂に異ならず侍るとぞ、されど硼砂てふものは、合藥製したるものにはあらじ、

○寛政七年の頃より、江戸の町の軒の下にある、水たくおふる桶に、町〳〵の名をしるしをけり、司商の官よりいひつけたる事なりとぞ、

○同じ年の頃より、錦畫てふ畫、又はうちはの畫などに、ものゝ名又は謠歌などを、隱語のやうに、畫もてかきし事行はれそめけり、南部の盲暦のたぐひにしたるものなり、

○錯字を去るには、蔓荆子二分、龍骨一分、松子霜五分（百草霜とかい定たるもあり）粉少し末とし、用ゆるときは、しろ水に點し、去らんとおもふ字のうへにぬりつけ、かはきたるとき、はらひされば、字ともに去るといふ、

○伊豫の國に扶桑木あり、土中または海中にのこりあり、此頃得てしかば、硯にせんとおもひて、それへ池をうがち、水をたゞへしが、あけの日みたるに、水いさゝかも減せず、その堅實石の如く、色は黑くして紫ををべり、鐵研竹研の名はあれど、かゝる木研は聞も傳へずなん、この木の事、尾藤氏の渉筆にもあなり、かの景行天皇十三年に、倒れる木ありとしるしたる、これなめりといふ、（越後州にも所在埋木をいだす、色といひ、質といひ、かの扶桑てふものにたがはず、）

○塩せいする事を聞しに、未明に濱へ出て、砂かきおこし、ひさくもて溝の潮をくみて、砂へかけぬるを、朝はまといふ、ひるまたかくするを、ひる濱といふ、晴て三四日も打つゝき右のごとくし、その砂をあつめて灑穴へもち行て、また潮をいく度もかけぬれば、鹽水下の穴

へ悉く入るを、壺屋といふにたくはへをくなり、これを一濱おしと
なんいふ、そのうちに雨ふれば、鹽氣流れ出て用をなさず、一とせに
七十度ばかりも、かくするを有年とし、二三十度を凶年とす、たくはへ
置し汐を、一とせに六七度やくを有年とし、二三度を凶年とす、竈は
簀をわたし、ところ〳〵に材木わたして骨とし、鐵にて上のかたへ
つるやうにし、簀の上に小石をならべ、石の間へ灰をつぎ入、石灰を
あはせてぬるなり、いかだなどのやうなるものなり、竈出來ぬれば、
壺にたくはへし汐を、筧にて大なる桶へ引いれ、それよりぬるめ釜
といふへ入れて、その汐水を少しぬるめ、（冷あれば火たくときさて竈損するゆゑなり）
へ入、火をその筏の下にてたきぬれば、竈のそこに鹽こりぬるをと
り、柄振といふをもて、かきよせてとるなり、竈屋のうち四五尺も穴
をうがち、そのうちへわらやきたる灰をいれ、かきよせたる鹽をそ

の上にをくなり、かくせざれば味辛く、いろも黑しとぞ、一日に十竈
ほどはやきぬるなり、是等その大概なり、赤穗などにては、竈を鐵な
んどにてつくる、されどおのづから年ふるにしたがひ、底不平に成
りてあしゝといふ、

○程子曰、多聞識者、猶廣儲藥物也、然須知所用爲貴、

又曰、君子之學、必日新、日新者日進、不日進者必日退、未有不進而不退
者と、げにしかり、弓など射るに、ゆるめじとおもへばゆるむなり、曹
參の畫一、一にとゞまるにはあらず、すゝむなり、

○いわ瀨撿校元愼都、針術をよくす、傷寒論甲乙、または針灸大全大成
のごとき、多く誦す、いと治術の功すぐれたり、我領奥州岩瀨郡の產
なり、東都へ出て、針術の修行せんとおもひたちけるにぞ、知識のも
の東都高名の醫なんどしるものは、皆ふみかきて岩瀨にやり、これ

をもてその先〳〵へ行侍らば、忽ち治療もひろく、名も高くなるへしと、おしへものせしなり、江戸へいたるの日、そのふみをば深くおさめて出さず、夜な〳〵市中よびありきて、按摩導引針治して業としけり、それより九尺計の小屋をかりて、こゝへうつりぬ、その日不成就日なりければ、人とゞめぬ、彼れはゝゑみて、此小屋に居とゞ侍らざる事はいなれとは、いひぬ、かのふみ遂に出さずして、今此ふみ出して、高名の醫なんぞにたよりなば、行末かれが奴僕となりて、かたをひとしくする事なりがたかるべしとて、人にもたよらず、かの小屋にうつる時、米びつかいぬるに、大きなるを望みけり、九尺の小屋に大なる米びつ、いかゞあらんといひしかは、君見給へ、程經なばその大なるぞ、用にたつべしといひぬ、それより名を發して、富榮へける、

○むかしタバコといふもの、蠻國より渡りたるが、公よりことに禁せられけり、ある商人、橋のうへを行けるが、下に乞食のひそかにタバコすふものあるをみて、人情のむかひぬるところなれは、此禁はやぶれなんとて、烟管烟盆の類は、禁せられて廢物となりけるを、俄にかい集めけり、程もなくて、その禁ゆるみけるにぞ、かの烟器うり出して利を得しより、つゐにいま富商のひとつとは成りにける、

○予か領中、川うつてふ山あり、川内とかいて川つつじ盛なるころは、うつとはいふ人〳〵見に行ことなり、秋のもみぢは、殊にすぐれたるけしきなり、諸州ありきて、名山大川見たるものも、此山のけしきみては、皆〳〵おぞろきぬる事なり、たゞ二里計の間、峨々たる山の間、溯水を左にし右にして行なり、布瀑も水渇せざれば、五六十ヶ所よりおちて、山間の極まるところに、玉のすだれかけたらんやうなるたきあり、も

みぢみに行たるが、十歩にたちとゞまり、五歩にみかへりして、そのけしきを賞しぬるが、山へ深く入りぬれば、彌奇景なり、はては人〳〵默しておとゝもせず、されば言葉もて感賞するは淺かりけり、このとき善畫のものゝ、ことに山を好みぬるをつれ行たるが、あまりに感じて、また明ケの日行たりし、さるにうちつゞきて行たらば、萬分の一は畫にもかき得てんとおもひたるが、けふみぬれば、きのふよりけにまさりて、筆の及ばざるをしれりといひぬ、總して眞によきものゝ、はじめはさしても思はずして、みるごとによくぞおもふ、

○伊勢ものがたりは、清輔か袋草子に、男女のたはくるひの事のみならず、舉たる歌も時代ことなるを贈答し、時代官位をもちがへなどし、おち〳〵ひが事多かれば、僻でとものがたりといふ意にて、伊勢ものがたりといふにや、昔いせ人の心はいとわろくて、親子兄弟の

ものをも、かたみにかすめ取なゞせし事、今昔物語に見へたり、契仲も堀河院後度百首に、藤原忠房朝臣池をよめる歌に、

伊勢ならは僻事そとも思はま志、やまとなるてふみまさかの池

又夫木抄に、鴨長明、

伊勢人はひかまとしつる津島より、かつ川ゆけはいつみの〻原、

とよまれたるによりて、作者の謙退して、聞およぶ所をあつむれど、定めてひがことおほかるべしとてや、名付たるといへり、また神風やいせなどいふは、伊勢は、いやせるの略語なり、されはあはぬものをぬい合するを、いせてぬふとはいふなり、引合せて作りたるものゆへ、いせものがたりといふといへる秘說もあり、いづれにやあらん、

定家卿の奥書に、只仰而可信、又云、上古之人强不可尋其作者、唯可翫詞花言葉而已と、いかにもうべなり、何の書は、たれつくりしにや、こ

の書は、僞作なめりなんど、博識の人ら、おのが博識に慢して、臆說する事少なからず、ゐきなき事なり、

○邵堯夫咏天意詩云、天意無他只自然、自然之外更無天、不欺誰怕居暗室、絕利須求在一原、未勞力時猶有說、到收功處更無言、聖人能事人難繼、無價明珠止在淵、

夜吟絕句、月到梧桐上、風來楊柳邊、夜深人復靜、此景其誰言、

又云、月到天心處、風來水面時、一般清意味、料得少人知、

惕應之題居壁云、有竹百竿、有香一爐、有書千卷、有酒一壺、如是足矣、

東坡記承天夜遊云、元豐六年十二月十二夜、解衣欲睡、月色入戸、欣然起行、念無與樂者、遂步承天寺尋張懷民、亦未睡、相與步于中庭、々中如積水空明、水中藻荇交横、蓋竹栢影也、何夜無月、何處無竹栢、但少閒人如我兩人耳、

戴安道曰、蔭映巖流之際、偃息琴書之側、寄心松竹、取樂魚鳥、則澹泊之願畢矣、

唐子西有詩云、山靜似太古、日長如少年、餘花猶可醉、好鳥不妨眠、世味門常掩、時光枕已便、夢中頻得句、拈筆又忘筌、

倪文節公曰、松聲、山禽聲、夜蟲聲、鶴聲、琴聲、棋子落聲、雨滴階聲、雪灑窓聲、煎茶聲、皆聲之至清者也、而讀書伊吾聲爲最、

醒言曰、聽瀑布可滌蒙氣、聽松風可豁煩襟、聽簷雨可止勞慮、聽鳴琴可息機管、聽琴絃可消躁念、聽晨鐘可醒潰腸、聽書聲可束游想、

これら讀書樂趣にいづるところなり、淸言くりかへしよみぬれば、かの香をたかずして、飲食夢寐の間、明月の懷に入が如く、微滓點染なしといへるに異ならず、されど是らの事をよみて、思ひを淸くし心を澄しぬるは、あつき日、玻璃器に水をもりてみるがごとく、只一

時の清きのみにして、あつさはかはらす、にごりたる心はもとの如し、されは夢はたゞ心とさめて、ひとりともし火にむかふもおかしく、まゐて鐘の聲、名もしらぬ虫のねの、枕にちかくすだくも、月の影しろくさし入たるも、または雨のおとしづかに聞へぬるも、時にふれ、折にあひつゝ、皆心をすます友とこそ成りぬれ、またうれたきふしには、月なき空をなかむるも、月影のくまなきも、外山の松風、雲井のかりがね、みなおもひをそふるなかだちと成りぬ、されば只我心ひとつなり、うれたきもたのしきも、外よりさそふものにはあらねば、外よりその思ひを消しぬるものにもあらず、物欲、心をおほひ、私情、むねにふさがれば、玉壺のうちに坐しぬるとても、などて心のゝしも清かるべき、只風をしたひ、月をめづるも、おほくは心の外の風流をよそに、てらいぬるにてぞありける、そのてらいぬる心からは、いかで物外の清音をきゝ、物外の清色を見なん、古人の言をきゝて只我心にもとめず、空ことに潔などいふは、何の益かあらん、よくこの事をいひたる古人の心は、いかにと味ひて、わが心にたちかへるべきものなり、

○足あればこそ手は貴けれ、足なくば手もてありくべし、われこそは乘輿するものなりといへど、人ありてその輿もてばこそあれ、人みなはしり去なば、こしよりはひ出て、かちもて行べし、山のいたゞきも、麓あれはこそ、花實のうるはしきも、根にこそあるべき、

○彩色をあらふには、牛膠水に半日ひたし、温湯にてあらふ、

○六硯齋記中にあなる、一とせの住候しるせしにならひて、

む月

元日の心のあらたまりたる、又は人のゆきゝのぞかなる、

雪間のわかな、○鶯のなきならふ聲、

ささらき

雨そぼふりて、軒のあたりより霞たる、○柳のあさみどり、

花の一つふたつほころび初たる、

やよひ

花の盛なる頃、雨風のしきりなる、○おそさくらの少しみゆる、

う月

わかばしげり行て、山〳〵の深くみゆる、○ほとゝぎすの初音人傳に聞たるに、雨もふり出たる。

さ月

五月雨の晴て、星のみへたる、○軒のあやめの露、○梅のいろつきたる、

みな月

おき出るころ、露のいとしげき、○夕月のほのめきて、蚊の聲もいまだきこへざる頃、○夕立、

ふみ月

夕つかた湯あみして、端居すれば、遠かたにて日ぐらしのなきたる、○やみ夜のいなづま、

きく月

はじめてわた入る衣ひとつきたる、○晴わたりたる夜の風高く吹かふ、○雁のこゑ、

かみな月

枕ちかく虫のなきよる、○ひるなく虫のね、○木の葉の庭にさはぐ聲、○のどかなる空、

霜月

冬枯の梢に、風の吹しきる、○雪ふる頃、障子に風のおとする、しはす

月なき空に、星のきらめきたる、○ひとり埋火にむかひて、灰へものかきぬる、○なやらふ聲、

○堆朱は張成揚茂周明を三作と稱す、存星ハ宋人にて、張成よりもふるし、紅花綠葉などにありて、堆朱金絲手にはなし、王圓王賢王山王挂漿呂詠黃成を合して十作といふ、錢珍錢鋪張源金潮林家明人張林同呂鋪交戚壽元人印袋龍門元人錢永同是を加へて二十一作といふ、

剔紅　いろあかし、地は黃漆なり、

堆紅　色あかし、深くあつくほりて、ほりめに黑線あり、

堆朱　色あかし、

金絲　色あかし、彫目にさまゝくのかさねたる線あり、またくろきものあり、

紅花綠葉　花鳥はあかし、木のはの類青くぬりあげたるもの、

犀皮　色くろく、ひろくほりて淺し、ほりたるうちあかく黑きかさねあり、

堆漆　地もあかくみゆるなり、

堆烏　ほりたる中赤き線あり、色くろし、

剔金　玳瑁まきゑなり、

丸連絲　金絲よりあさし、

松皮　黑くほりたるところ、あかき重ねあり、

是らは大永三年松雪齋のかいたるを、抄出したるなりとぞ、

○少年多病なるものよく壽を保つ、されは養生調攝の道にありとし

るべし、かの樂天が十八歳のとき、久爲勞生事、不學攝生道、少年已多病、此身豈堪老、といふ詩をつくりたるが、攝生の道、心とせしにや、保壽七十五なりと、何かにかいをけり、

○水銀一味糊丸にするは、燈心を滚水にひたしかはかし、その燈心を細かにして水銀へ入、糊におしませぬれば丸となる、

○水に油を和するには、片腦樟腦雄黄薫陸各四匁、琉黄檣丹（長吉と稱する）金みつた銀みつた五味各少し、さて皆末にして合せ、水一升にてせんじ、油へ和し、又せんじ、しばらくして火を減じ、藥物のそこに沉むとき、油ばかり汲とる、水一升に酒三合、糟少し、鐵百目、燒て入たるは猶よし、油は荏を用ゆ、

○又方、雄黄薫陸樟腦三味末にして、酢油等分にして、三味入せんじ、しきみの葉もてかき廻しぬるもよし、樟腦明凡鐵少し、水一升に二三

匁も入、よくにてのち油へ和し、（油も一升ほど）よく煑て壺へ入、三四日もをきたるもよし、

○京の伶人岡伊豆守となんいふは、笛の名人なりけり、人にいひけるは、予は上手といふには到りしやしらず、名人は一生に妙なる事のあるといふ、予是まて妙なる事とおぼへし事なければ、われは名人には成らじとぞいひける、死期にのぞみて、この世の退出にとて、長慶子をふきて忽ちに歿したり、その孫、伊勢守とかいひし、これも上手なりしが、三十あまりにて病に伏しける、死期に至りて、祖父の伊豆守は、ふへふきげるが、予はこゝに至りて、吹ものする事はなりがたし、祖父の志ばかりつがんとて、長慶子のしやうかいひて歿しけり、いとすそうなる事になん、今その伊勢守のつぎの代にて、近江守とかいふ、されば遠きものがたりにてはあらず、予か藏する堪能丸

は、此伊豆守か秘藏して、堪能丸とつけよとのみことのりなり、近江守より予にゆづりしなり、

212333

退閑雜記卷之四

○軍師八藏、予に歌を乞ふ、

古への七つのふみをまなふみも、五の常をもとゐにそする、

うてはうつうたねはうたぬ影なるを、鏡の中の人とうらみそ、

とかいてやりぬ、

○茶の古くなりて、しつのにほひ入たるには、せいろうの如きものへ茶を入、にんにく一つなかへ入れ、文火にてむせば忽ちにはへさる、

○朝せん人參のたねは、竹の林へまきぬるがよし、雨露も多くあたらず、日のてらざるを好、

○甘蔗は舊根より出るを尊ふなり、とかく舊根はくさるなり、苅とりしあとにて、わらをその株へ多くおほひ、火をもて株をやけばくさ

れず、春芽もゑ出てよくさかふるなり、

○越前にて奉書といふ紙を漉には、うるののりを用ゆるなり、あくとても、毒荏の實の皮をあくに用ひぬるなり、もしこの實なければ、うどのあく、又はよもぎのあくを用ゆるなり、わくは灰なり

○圓光大師の行狀畫卷物は、當麻の奥の院にあるをよしとす、いま板行にあるは、此圖にあらず、予がおさめし寫はこれなり、

○諏訪の繪縁起、ことばがきありて、畫いまだみず、信州上下のすはの社にはなし、

○江の嶋繪縁起、ゑのしまにはなし、

○前九年の繪卷物は、加州の藏なりしが、燒うせぬといふ、

○井の水にも、しほの滿干あるべしと思ひて、堀ぬきといふ井を、四日五日の間くむ事をやめて、滿干を試みたるに、固より雨ふらぬ頃なり 大概あふ

なり、海上の滿干とても、日々いささかのたがひなきものにはあらず、大概にも滿干のわかるゝは、考なきにもあらず、この增減をしるにゝ、細き竹の先きに薄板を丸くして、井の水にうかべ、その細き竹、井筒のうへに出たるに、分寸をきざみをくなり、ゆへに井の水の多少によりて、板上下して、分寸をさすなり、

○ある夜、歌よみけるに、題出すにしたがひて、いちはやくよみたるに、題も盡たりとて、かたはらのものわらひければ、

きりて出す題もなけれは言の葉の、つぎほの花は咲かたもなし

といひたはふれぬ、

○木へものかくに、墨のにじみぬるには、五味子を五つ六つすりつけてのちかくなり。金箔などの墨はぢくには、活石の粉をわたにつけて、よくぬくひかくがよし、

○劍槍の術にてもあれ、軍旅の事にてもあれ、我にかたずして、人にかたんとするゝ、いと無下なる事なり、われにかつてふ事は、克己の事なり、萬藝一理なり、よくこの所を味ふべき事なり、

○我封領中、みちのく船田の里にて、古劍又はまがたまくつはなんぞやり出したり、みないとふるきものなり、そのうちに太刀は殊にやうかわりて、つかもさやも、みなこがねもてつゝみ、つかのとまりに丸きものつきたり、かのかうつちのつるぎより太刀になりたる頃の品にて、おほよそならの都などの物にもありなんと、事しれる人はいふなり、

○相學てふものは、いにしへよりもある事にて、もと五行生尅よりして、ことはりつめたるものなり、かの水中のおもては水上の人、鏡中の人は鏡外の人にて、おのづからなる道理なり、すこし文字まなぶものは、ことにそしるべかし、世の中にあるとある事、みな道理いちじるしき事はなきなり、かまへてその理を窮めんとすれば、無益の事にて勞するなり、只吉凶の相あらはるゝとも、敬怠の二字にけつすべし、

○蠻書てふものは、さして國用にたるものにもあらず、只好奇のものの事なり、予も過し頃、蠻學てふ事はせざれども、この事を和解させ、此品を製しなんなどおもひて、試し事もありしが、便なること、あれども、またかなたに損あり、利害損益半するは天地の道なり、それがなかに、一輪車もて土石はこぶい、人力を省きて利あり、天文醫療物産などの事は利少なからじ、たゞこ禁ありても、隨ひかねぬる人情になりもて行も、畫といふも、近き頃は蠻畫の意になしぬる、又は蠻學などたづさわりぬるの多きも、好ましからぬ事にはありけ

んかし、されどかくいへば、遠慮過たるやうにやあらんか、智識すぐれたる人は、いかゞ思ふらん、猶きかまほし、

○古畫類聚てふものをつくる、この卷のはしにかい付ぬ、

ことばもていひつたふるも、筆してつたふるも、程こそはありけれ、あかきは赤きといひ、白きはしろきといかきも傳ふれど、かゝる色をあかしといひ、とあるを、白しとなむいふ事は、こと・ばにも筆にも及びぬるものにはあらず、されば畫てふものありて社、文筆のかけたるをも補ひて、ともに後徵のものとこそいふべけれ、たとへていはむに、年中行事の繪ありてこそ、宮殿服章器財なんど、章々として明かなるをもてみるべし、ことばを盡していひ、筆をふるひてかいたるとて、みざるものゝ、みるやうにあらん事はかたかるべし、いづくの國にも畫てふものはありながら、我國の畫こそ、いとたうとけれ、から國の畫も、ふるき代には、その眞を寫しけれども、多く風俗の玩びとなりて、あるは禽獸草木、あるは山水のけしき畫きたるぞおゝき、されど今のこりたる、十八學士なんどの畫あればこそ、初唐の服章もうかゞはるべけれ、その〳〵ちよりしてい、かの陽秋の何のといふに畫きたる如く、代々のかうかへもなく、たゞ僞をかきのこす事とは成にけり、我國の繪は、もぱらその眞をうつす事なれば、みなかうかへのよりところとなりて、文筆にもつゝきぬる、貴き業にてぞありける、いにしへはすでに、畫工司を設けて、畫師畫部等あまたをかれたるも、皆まつりごとの爲とぞ、其用軍防令にみへし、さるをその畫にたへなるもの、牧溪なんどのかきぶりまなびてや、雲烟のやうに墨うちながして、薄きは、遠

き山なむどゝみへ、濃きは、もり林のやうに見へて、をのづから
のけしきそのふるやうになせしを、一奇觀とせしなり、これも
あしきにはあらざれども、みなその風情に成りもて行て、つゐ
に畫てふものは、翫びのわざとぞ成りにける、天造の妙なるを
筆に盡しぬるを、いと高き事と心得て、つゐにその高きが、いつ
かもてあそびのわざとなりし、ひきゝ事をしらざることなげ
かしけれ、それより繪のことをば、そらごとなむどゝ、いふ事に
さへなりくだりたる、しかはあれど、ふるき繪の今に殘りて、其
德なをあきらかなるをもて、ちかきころは、またたうとむ人も
あまた出來ぬ、これひとへに文化ひらけしおほむ惠のあさか
らざる事、仰に餘る事になむなを畫は書と源を同しふして、今
のいにしへに及ばざる事、かの張彥遠がことばにもくはしく

見へぬる、かくまでたうとき繪の、幸にいまの世まで傳る事な
れば、その繪の卷〳〵抄寫して、門類をわかちをきたらむには
好古の人の、かうかへのたよりにも成なんものをと、年ころ心
にかけて、かしこにもとめ、こゝにこひて、かきあつむるにぞ、つ
ゐにあまたの卷とはなりぬ、名つけて古畫類聚といふ、是をこ
の序なんどいはむもおこなれど、今この御代のありがたさを
あふぎ、かつはふるき畫のたうとき事いひなんとて、つたなき
筆のまに〳〵、いさゝかかいつけぬる事になむ有ける、

寛政七つのとし、葉月三日、

凡例

一四門をわかつ、人形服章宮室器財兵器なり、

一人形服章、門をわかちては、みがたきによりて、ひとつにしるす、

つきしきしのなかにかいたる花鳥の類ひ、こゝへ附添す

一宮室の門には、城郭營壘の如きも、祠廟寺觀市肆店舗馬舍囹圄、あるは垣墻門戸屋壁砌礎のたぐひもしるす、

一器財供御儀物よりして、舟車輿轎工匠利用庖厨家什傘笠杖鞋のたぐひまで、

一兵器は器財のうちにありといへども、品かずおほければわかつ、ひたゝれの如き、舟揖のごとき、服章器財のうちへいるべしといへども、鎧直垂兵船の如きは、此門のうちへいる、

一うるにしたがひてしるせば、畫者の時代にもかゝはらず、

一傳寫の誤は、なを原本をもて、追て校合すべきなり、

一山林草木河海の如き、いまもいにしへもかはらざるは、かうかへの便にもならざれば、べちにしるさず、されどもみちのくのしほかま明神の社かいたるに、山海などあるは、地圖のかうかへになるべければ、宮室の部にいるたぐひもあり、

一たとへば、かつぎぬきで弓もちたる、そのかりきぬの製、めづらしきゝ服章にいれ、弓のかたち異なれば、兵器にいる、重きかたによて門をわかつ、

一宮室の部は、裏松入道のあつめたるをつぐ、ゆへに一補字をくはふ、

一古畫たる事いちじるしといへども、傳來のたしかならざるは、附錄のうちへいる、

○馬上少年過、世平白髮多、殘軀天所赦、不樂是如何、といふは仙臺黃門政宗の詩なりといふ、しかるに馬上青雲過、世平白髮多、老軀天所赦、不閑今如何、といふなる詩、氷川詩式にあり、いかにも唐人の句調な

りとかいふ、

○東江源鱗、二王の書學ぶとはいへど、筆意いかゞあらんとうとみおほへけるが、文字しる人ひとり來りて、かの源鱗にうちむかひて、死蛇などいふ事は、筆道のきらふ事なるは、やはかしり給はざるべき、君がかくところは、そのきろふ所にあへり、日頃うたがひ思ひたれば、いふなりといひけり、源鱗ことによろこばびて、君ならでたれかかくはいふべき、予もその事を耻思へども、いまは東江風とやらいひて、世上もはらもてあそびて、生産にも成りぬれば、せんかたもなし、されど後の世に傳へんもはいなければ、わが好むところをかい置たりとて、みづから一つの卷とり出したり、ひらき見れば、ことにやうかはりて不凡の筆意なり、ことにいひし人感しければ、この卷予か家に祕しをかんもせんなし、君ならでまいらすべきものはなしとて、その人におくりぬといふなり、予もその卷をみしが、いかにも世にいふ東江流などゝは、ことにやうかはりてかくばし、あしきをしりても、生産のためとてあらため得ざるは、心おとりするものから、此卷などたゞちにそしりたる人にあたへしなどは、潔しともいふべきか、春章となんいふ、うき世繪かく人は、いと心たかくて、すでにこの春章がかいたる畫は、殊に高料になる事なりしを、いとはぢて、ひなびたる畫はかくまじとて、友どちに乞て米錢少しとりあつめ、甲州の山へみとせ計もかくれて、もはらふるき畫をのみ學び、乙卯の春のころまた出ぬ、それよりはいかにいふとも、うき世繪はかゝさりしとぞ、たしかなる物語なり、春章の氣象、ことにすぐれておかしげれ、

○平岡美濃守は小知なりしが、つるに御側の職にまで進みたり、この

人學問などの事はきかざりしが、むかしきけるに、この人の言ける、は、予はこれまで只一ことを守り侍る、何ぞと問ひしに、いつもはじめといふ事、ふと思ひつきて守り侍るなりとはいひぬ、いと殊勝にこそ侍れ、

○何にてもあれ、木の實をつきくだき、少し蠟を加へてねりかため、ろうそくのやうに長くして、火をつくれば、ことに光あかくして燈費をはぶく、蠟くはへずたゞつきくだきしを土器へ入、土器のそこへ穴二つ三つ穿ちて火を點すれば、よくもゆるとぞ、

○蠻國にて寒氣はなはだしき土地にては、皮もて面をおほひ、目計り出して、外もなど歩行とぞ、もし耳鼻などあらはるれば、忽ちこゞへて石の如くになり、家に入て暖氣を得れば、耳鼻もとけおつるとなん、乳酪に丁子肉桂末を加へてぬれば、いゆるといへり、

○乙卯十一月九日、柔道の本體の傳を得てけり、この柔道といふは、世にまれなるたとき事にて、外にたぐひはあるまじ、かの鈴木氏の家にむかしより、日本神武の傳のこりたるが、おほろげにかいたるもの計りにて、たれも覺へしものもなかりしなり、しかるに今の清兵衛が父なりけるもの、この道を得ゑはしくて、劍術をも四五流、柔術も六七流ほど、極め盡したるが、なかに起倒流こそいとやすらかにして、少しはかの道のかたはしともなるべけれと、おもひつきて居たりしが、ある日、道行けるとき、何とかいふ橋をわたりしとき、一旦豁然として大悟す、それよりは、劍つかふも柔術學ふも、たゞまくることのみして、のちにはあまりに多く手なぞうたれ、黑くはれたりけるにもいとはで、たゞまけにまけたるに、その心術よく出來しときは、ふしぎに勝し事度〳〵にて、心におほへけるとぞ、それより修

行勤行して、つゐに此道を開きける、いと尊き事にこそ、翌年、天卷の傳をうけぬ、

○丙辰のとし元日によめる、

あふくそよくもらぬ春の日の光、山もうこかぬ御代の榮は、

世におほふ君か袖より吹そめて、惠しくなる四方のはる風、

治めしる君は萬つの民とゝもに、盡せぬ千世の春や樂しむ、

年〳〵にしける緣の小松原、千世のねさしの見へて樂しき、

○白及は、紫こんをいふなり、その根の乾きたるを粉にして、表裝の、りにすなりと、もろこしの書にあんなり、こゝにては白及根の粉をねりて、ふしなどおしまぜて、陶器の損じたるをつぐなり、水に入ても損せず、

○木を刳りて、角を入たるやうにするには、イボタロウに蠟石の粉三分、石灰少し加へてねりあはせ、刻字へすりこみ、外をよくのこひ、五七日もかはかし置なり、

○風犬傷にゐ、まちんを砥石とぎたる水にひたし用ゆれば、發熱ことにはげしくして發狂す、一夜にして全愈、

○晩蠶蛾は、よきかいこのてふになりて、交合するを引はなし用ゆれば、功ことにいちじるし、

○茶しやくのつゝにかきぬ、

匙は主也、筒は家也、もと是同根、

たときとていかて奢らんいやしきも、一つ緣の竹のよの中、

○遠州のつくりたる色紙釜てふものあり、心にかなはねばかへあらためて、其箱に書ける、

遠江守政一朝臣の色紙釜てふものあり、色紙かた四つありて、

槇たつ山の秋の夕くれのうたと、とく〳〵とおつるいはほといふなるに、またそのこゝろを一ツ〳〵ゑかきて、鑄つけたるにぞありける、政一朝臣はたゞ身のほどもおもはで、わびにわびたる事をこそ、おかしとおもひ給ひけめ、されどそれは西行法師なんどの身の上にこそあるべけれ、只この道好むものは、わが身の程をしることを本意なれ、されば汲はすほどのわが住居かなといふ字をけづりて、くみて世はたる人もこそあれといふ字をくはへたり、かうやうにやすく樂しみても、苔清水汲はすばかりのかすかなる世すぎする、いやしきものもあなれば、とみたときとて、いかで奢に長し人に高ぶりぬらんといふ、坐右のいましめにもかなひたれば、かくはけづりあらためしなり、

○正平などいふ革つくるには、白きもみ革を湯氣にあてうるほはせ、赤がねのかたはりたるにのせ、砂の袋を一面にあて、足もてふむなり、さてかくして藍たねをせんじ出し、はけを根よりきりて、それにて力にまかせ摺つくるなり、あかきいろなどは、あとにてさいしく事もあり、またはふたゝびあいかたにて摺もあり、

あい種とは、藍染するところの壺のちうに、幾年かひたしをく布なり、是をたねとはいふなり、それをふたゝびせんじ出したる汁を用ゆ、

○細川銀臺のやしきにて、犬追物を見る、

寛政八のとし、卯月はじめの六日、熊本の君の銀臺の別業に至りて、かの犬追物てふを見けり、折しも空うちくもりたれど、かねて約せし日なれバいで、行、けふつどふ人とては、彦根少將藤原直

中朝臣、德島侍從源治昭朝臣、鳥取侍從源治道朝臣にてぞありける、治昭朝臣はさきへいで玉ひぬ、うちつゞいて行たるが、辰の中刻のころ至りぬ、名たゝる大家の別莊なりければ、いらかならべし屋のたてつらねて、いとおごそかなり、門までこしかきよせて出んとせしが、門のうちへのりいるべしと、ねもころに言こし給へり、治昭朝臣ものり入給ひしときけば、おなじく入ぬ、しばしあて柴門あり、それよりかちもてゆく、熊本の君出むかひ給へり、一禮して小亭へあないし給ひぬ、この庭いとひろき芝生にて、ところ〳〵に大きやかなる石のたゝすまひおかしう、喬木のわかみどりしげりたるなかに、藤の咲たるなんぞ、いとおかし、亭中せばきも興ありて、主客まどゐしてかたりあふもめづらし、亭に扁して吮玉といふ、關思恭のかいたるなり、雨すこしふりいでぬ、時刻うつりて、いたうふり出なば口おしかるべし、射手なんどゐうち揃ひたれば、はやくかのところへ出よと、あるじの君のゝ給ふにぞ、皆打つれて出ぬ、木立しけりたる中に石の塔あり、きけばかの檜垣の女の塔をうつしものしたるなりといふ、それより櫻の林などうち過て、見わたせばうちゆひまはしたるところ〳〵はるばると見へしに、こゝなめりとよろこばびて行ぬ、かり屋をたかくかまへて、階かけわたしたるところへ、おもと人のあなひして、客主ともにのぼりぬ、その下を見わたせば、三十間に四十間とやらん、眞砂うちしきて、よもにらちおごそかにかまへしなり、中央に繩うちまはし、そのそとにまた繩うち廻してぞありける、これをなん小繩大繩とぞいふなる、かり屋の左のかたに、松の枝葉つきたるをたて、そのうへのかたに、鯛てふ魚をふたつわらもてゆ

ひつけ、下に八脚のつくへに、錫の瓶子二ッ三寶にのせたり、贄とゞ聞へし、こゝにて猶けふのかたじけなさなど人〳〵言のべぬ、世子こゝへ出給ひて、はじめて謁見しぬ、端嚴聰明、進退度にあたり給ひて、いと末頼母しくぞ見へ給ひぬ、犬追物はじめべしとの事にて、しばしありければ、むかひの埒の門ひらきて、記ろくする人ひとり、小わらはふたりゞ出たる、ゑぼしすはうにくつはきたり、小童は采ふる役なり、こなたの門をいでゝ、日記所へのぼる、それよりして、射手の人のり出たり、三手組となんいふとゞ聞へし、上手はむかひにならひ、中手は右のらちぎはにならび、下手は左にならぶ、これもすはうゑぼうしむかはぎし、弓手にこてはめ、弓もち矢はさみ、むちはうでにかけたり、三手とも十二騎あるべきを、こたびは略して八騎とし給ひぬ、撿見およひ呼次てふ人も馬

に乘ていでぬ、これもおなし裝束し、籠手弓矢はなし、列たゞしたるのち、撿見大繩の正面へ乘出して馬とゞむ、呼次ものり出して、左の埒きはによりて、繩にむかひてとゞむ、うはての人〳〵みなのりいでゝ、大繩をしりにしてとりかこむ、撿見たれかあるといへは、下部のおのこかけいでゝ轡をとる、おりたちて小繩まですゝみ、一禮してまたのる、射手の人〳〵中手も下手も、みな弓つえついておりたち、撿見とゝもにまたのる、それより撿見大繩のうちへいれは、射手もみな大繩のかたへ向ふ、撿見むちあげて、御犬やあるといへは、すはうにたすきかけたる下部、犬ひき出して大繩のそとにまつ、また鞭あげて、ひき入候へといへは、小繩のうちへ牽入、犬をおさへて、御犬にけ候と、三度くりかへしていふ、むちあげて、はなち候へといへは、犬をはなつ、射手矢つがひ、犬にむか

ひながら射る事なし、また初の如く犬ひきいれ、馬そのまゝにして射る、かくする事二たひ、そのゝちはかけいづるを追ながら射る事なり、射やうにもさま〳〵の禮ありとぞ、射あてし人は矢ぞゑかけ、のりかへしてその矢のあるところへ馬とゞむ、撿見も聲かはしてのり來り、馬とゞめて、矢どころあたりたづねてまたのり來れば、呼つぎてふ人、のりいでゝむかふ、撿見、何がし矢どころゝ妻手、あたりは矢當なんどいへば、呼つぎかり屋の前へのりきたりて、たれかあるといふ、下部いてゝ轡をとる、呼次下馬して、何がし矢どころ何、あたり何といふてしりぞく、贄ある左のかたにかり屋あり、こゝを日記所となんいふ、こゝにて記ろくし、さいふるなり、呼つぎ下馬をゆるすの禮ありてのちは、馬上にて矢所なんどいふなり、この興あるがうちより、雨ことにふりいでゝ、射手もみなしどゞにぬれたり、年頃の本意かなひて、かうやうのめづらしき事み侍るに、たゞ雨のふり出たるぞ口おし、われら計、この屋にのぼりて興し見侍るも心なし、とものぬれつゝみ侍らはやとおもふばかりなり、されはこのまゝにやめ給へかしとあるじの君にいへば、このでろきそひ進みて居侍るなれば、なぞて雨なんどゞ、いとひ侍るべきなどの給へとも、餘りの心くるしさに、さらは略してもはやくやめ給へと直中朝臣なども、ことをそへていひ玉へれは、つゐにその命を下し給ひぬ、十疋を略して半にして、呼次のり出て御犬十疋とよびて、禮をそなふ、かくせしかは、撿見はじめいでしかたへのりかへる、中手のり出して上手のはじめのりならびしかたへ列す、下手はその馬のしりのり通りて、中手はじめならびしところへ行、上手はのりほどして、下手の列

たるあとへ列す、また撿見こと人出て、初の如くし、中手縄を取かこみ犬を射る、犬はなちて射ざるは、上手のはじめにありしのみにて、こたびは馬とゞめて二たび射て、のちゝ追ふて射るなり、うは手の如くおはりぬれば、下手乗出して、中手のならびしところへ行、中手はのりはぢして、下手の列たるあとへ列す、夫より下手射おはりて、また三手くみ初めの如く、列をたゞして三方に馬をひかへ、下馬してむかはぎのすそをかへして少しすゝみ、一禮してみな入る、馬はその人のあとへひく、下手の射やう、中手の如くなれば略してあらはさず、その興あるさまいさましき風情いふべくもあらず、たゞふるき畫などみるやうにて、いまの世にかゝる禮ののこるのみか、よくとゝのひて、世〳〵につたへならはせしかしこさ、いひもつくすべきものかは、禮を盡してかり屋をく

たり、はじめの小亭へかへる、こゝにてかれいひ出、酒などもいだ
り、おもふぞちのまぞめ、かの和して流れず、水の如くなる交のむ
しろに、予も列しぬる事よと、うれしうものしたり、しばしゝて射
手のかたより、いまひとたびし侍らんと乞出たり、あるじの君そ
のよしつたへ給ふ、予輩みまほしさは餘りあれと、雨も又やみし
にもあらず、はじめ見しにて本意とげぬ、再ひ催しぬる事はやめ
給へかしといへと、射手の人〳〵もひたすらにのぞむよしにて、
つゐにいまひとたびしぬる事にはなりぬ、こたびは、ひと手組な
りとぞ、みなかり屋へ行ぬ、記ろくする人なぞいづるも、はじめに
ことならず、射手十二騎いでゝむかひに一列にたてり、是ぞ三手
組とはたがへり、是も犬十疋あまり射はてゝおはりぬ、たゞくり
かへし見ても、いよ〳〵禮の整ひたるぞ、感賞にたへず、犬のこゝ

をせにどゝはしり行を、射手くつはみをそろへて乘はしるさま、目ざましき風情にて、弓手妻手おしもぢりなんど、さま〳〵に射なすに、犬のたゞにげのがれたるは少なし、犬とゞまれば射ず、撿見來りて犬おへど、ひそまりかへりて居たるをば、捨候得といひて乘かへし、またこと犬をはなさするなり、もし馬よりおつるあれば、相手くみといひて、そのうちに二騎づゝくみあふが、ひとりおつればはせ行て下馬し、おちたるものと互に一禮して馬にのる事なり、その外、撿見の心きゝて、ふたりあたりても、ことはりたゞし、あたりをさたし、優劣しぬるなんど、事になれてぞみへぬ、けふの雨には、袖も決拾もぬれにぬれたれば、弓矢つがふも、むちあぐるも、そのわざ常の半にも至りがたかるべし、まゐて眞砂もしるければ、馬の進退もしがたきを、かうやうに目をおどろかすはどのありさま、言の葉にも筆にもいかで及ばん、こたびは俄にならはしめ給ひて、馬も馴ず、それさへかゝるを、年頃なれ習ひたる人の、かの熊本にてなすは、さこそとおもひやりぬ、いで犬追物てふ事をこたひ興行ありたるは、させるふしある事にもあらず、官醫の堀本氏なんどすゝめものせしによて、催し給ひてんやとの事聞へしかば、治昭朝臣予らうけしたがひてすゝめたり、有司らにそのよしの玉ひけるに、俄にとゝのひかたく、何事も省略して、は、古式のかひもあらじとて、かたくうけがはざりしよし傳へ玉ふ、よて成就したりしを見るとはおもはじ、ならし給ふ折にあひて、きたり得て、ためしてみしとこそおもふべかめれと、治昭朝臣なども、いひ給ひてより、この事みる事とはなりぬ、熊本の家もとより文武の道をたしみて、もろ〳〵の禮儀、みなこの家に傳へぬる

事なり、ことに當時の君、先緒をつぎ給ひて、よろづの事まめやかにさたし給へは、かうやうの事までも、なをとゝのひぬるぞ、いとうとき事になん、ひと手組もおはりぬれば、あるじの君あないして、馬埒を過て世子の亭へ至り、こゝにても菓酒などたうべ、みないとまこひて、未の中刻まかでぬ、

○泉岳寺てふ寺に、丹羽氏より碑を建られたり、丹羽長恒朝臣の碑なり、十六羅漢をはりて、銘は關源藏（其寧）ぞかいたる、石工數寄屋河岸にすめる、伊せや佐七となんいふもの、ことにすぐれたるたくみなり、四百金にて作るべしと言しが、思ひの外早く出來ぬれば、三百金にてたりしとて、百金をはかへしぬ、あまりに精巧すぐれたりければ、名をはり侍れといへど、名ははり侍るにも及ばずとてはらず、この氣象ありければ、其たくみもいとすぐれたるなんめり、石工名はしるさずして、かへりて人〳〵はめとなへ侍る事にもありなん、されど後の世に至りて、しる人もあらじと、こゝへかいつけ侍るなり、

○ある人、魚の骨たてたるが、諸醫手をつくせどもぬけず、はれにはれて食する事なりがたく、みす〳〵死をまち侍るのみなり、とても死ぬるものならは、故郷へこそかへるべけれとて、駕籠にのりて故郷へかへり、その道にて老僧に逢たるが、かくとかたりければ、此藥をこそたうべ侍れとて、一匕やりければ、白湯にて送下す、たちまち骨ぬけてけり、いと奇なる事なり、そのくすりをあとにてたづぬれば、土用中に、芭蕉の卷葉をとりて陰干にし、未にし侍る也とはいふ、

○のどに餅ゐのつかへたるには、ふきのとうの黑燒をのむべし、

○墨ながしといふことなすには、多は粉のきざみたるを少し入るれは、よくあやをなすなり、

○菖蒲革は、紙のかたにそのかたはりぬきたるを、革にあて、よくふみつけ、うへよりうどんの粉をふのりにてねりてぬる、そのうへよりあいをひくなり、よくかはきて、革を左右へひけば、そのうどんの粉はおちぬるなり（うどんのこにふしをいるいもよし、また石灰入るもよし）

○馬の口をひらきて舌を動かさざるは、氣のしづまりたるなり、

○腑かへりの馬は、早朝にうはまぶちをかへしてみれば、常は赤筋あり、腑かへりやまんとする日の朝は、青筋になるなり、そのとき少しも動かさず、益氣湯を用ゆれば、たちまち愈、

○馬のいきは、呼吸のしげきも、つよきもいとはず、動氣といふものありて、息につきあふときは、呼吸なくてたゞ外へつよく息をはくなり、そのときは乘やむべし、耳あらしといひて、耳のうちより霧の如く氣たつときも、のりやむべし、鼻よりいづる事もありとなん、同し事なり、

○細川越中守齊茲朝臣の畫に贊せよと、あるかたよりひたすらに言こしたり、

畫は、月のひかり波にうつろふさま、金銀泥もて書たるに、島山の松を、くろくさやかにかいたり、

しま山のまつの木の間もさやかにて、月の影しく秋のうら浪、

○勞症傳尸のたぐひにも、山椒魚を藥のうちへいれ用ゆれば、甚驗あり、氣の因たるには氣藥に加入し、血によりたるは血藥に加入するたぐひなり、尤藥一劑に敵する程にいるゝなり、

○耳襲たるには、琥珀の油に麝香を入て、耳にさしぬる事十日計にしていゆ、いと奇なり、琥珀の油はヲンビキといふものへ、こはく一斤をくだき入、水など入るゝ事なく、たゞちに火にくはふれば油いづ

るなり、ゑんしやうのせい氣も、右の如くしてとるなり、砂をしくにしかす

○わが浴恩園の事をしるす、

おほん恵の淺からぬをもてその〻名とし、不諼の意を後代にしらしめんがため、つたなき筆をも憚からず、そのよしをかいつくる事になん、いでやこの園は　橋府の御園なるを、あなたこなたの便宜にしたがひ、

大君より御ゆるしをたまはり、その御園をかへものし賜りたり、御そのなりしころは、大なる池をみなもと〻し、いくすぢも溝はりて、その水をせき入給ひし、こは鴨などのきたりすむべき料なり、兼葭おほくしげりたるは、鵜てふ鳥をあつめらるべきためなり、みな放鷹の御遊にそなへ給ひて、やんごとなき御方の御園には、いとうべなる御事になん、予に賜りし後も、亭榭山水草木にいたるまで、おほくあらためず、しかはあれど、かふてふ鷹もこ〻らにはなく、ことに憚べき事なれば、よしあしかりて池なんどにし、あるは倉廩たつるに船入べきために溝ほりひろげ、また材木そなへをきぬる池なんどもふけて、その土をかいあげぬれば、をのづからの山のかたちをなしぬ、花もみぢなんどうへたれども、みな尺あまりの苗にて、年經ぬる盛を期して、いまの費をいとひたるなれば、園を得て六とせほども過にけれど、そのけしきまさりぬるやどには成りがたし、

園を入れば馬埒あり、こ〻を過れば秋風といふ池あり、こ〻に亭あり、秋風をもて名づく、予がもと居たりし所の小亭をこ〻へ引もてつくりしなり、池に嶋多くあり、あるは半月と名づけ、あるは華表と名づけ、あるは天女しまなんどいふ、そのかたちにより、ま

たはあるところによりてよびはじめけり、池のほとりに感故てふ小亭あり、こは　橋府の御園なりしとき、馬見給ふ亭をこゝへうつしたるなり、亭のまへに吹上のはまのしらぎくをうへて、波かあらぬかと詠し給ひたるむかしを感するこゝろはへなり、そのうしろは山なり、山中に小池あり、過しとし

大君より給はりし蓮を此地へうつしうへぬ、故に賜湖賜山となん名づく、この山を過れば、また大きやかなる池あり、岸に花木うへたれば、とし經ぬる後のけしきおもひやりて、春風をもて池と亭とに名つく、此亭は　橋府のたて給ひしなり、亭を出て梅のはやしなど過れば、澹然と名つけし小齋あり、御園なりしとき山上にありし亭なり、このあたりに柳灣倉といふあり、倉廩のかたはらに柳あれば名つけしなり、それより田なんどあるところへ行、いとせばければけしきもなし、柱四ッたてたるやうなる、いとあやしきつくりにて、休らふところをかまへたり、民草の艱苦をみしるも、また戒の一つならんとて、知艱と名つく、田を過て春風池の岸を行ば、山あり、山上にもまたあやしげなる柱四ッたてたるかり屋あり、遊仙といふ、海はらとを〳〵見渡し、房總の山〳〵淡濃畫がくが如し、此やまを下りて秋風池のきしを行ば、萩いとおはし、行過しぬれば小樓あり、過しころ予か居たる亭の小樓をとりくづしをきたるを、こゝへまたうつしたるなり、御園なりしときもこゝらに亭ありしが、海のおもてちかく、風いとあらければ、さきにとりくづしぬ、こたびは海岸に松なんどあまた植て、其中にもふけぬ、樓いとせばけれども、松のひま〳〵海づらみやられて興あり、これぞこの別業の大概なり、たゞくりかへしてもおも

ふ、予いま此山莊に行て、花をめで紅葉をもてはやし、小樽を携へて心ゆたかに散歩しぬるも、みなおほん惠に浴しぬるにてこそあれ、まゐて大任をになひたるが、つゐに辭し奉りし願ひもかなひて、かうやうに山水なんど樂しみぬるありがたさは、いかで筆にも言葉にも盡すべき、されば われひとり浴しぬるにもあらじとて、わが藩の士女にも日をさだめてこゝに行て遊ひ樂しむ事をゆるしぬれば、士女のいやしきまでも、ひそかに　御惠をあふぎ侍る事になんありける、

月にむかひ雪をめつるもおほけなき君か惠の露の花園、

○過し年、京へのぼり、みちすがら心にうかぶ事かい付たるを、反古堆より見出したり、

中仙道の阪本といふより、松井田となんいふところへ至る、山の

岨に釜石てふあり、かたちもて名つけしやとおもひみれど、させるやうにもあらず、怪しみてかたはらの石をもてうつに、鏘然と聲出たり、さらばこと石には聲なきやと、人〳〵左右の立ならぶ石をうつに、聲なし、はじめてこと石にことなるをしりぬ、たゞ左右の石は、無能にして有能に立まじるをもてうたるゝなり、釜てふ石は能ありてうたれ、左右の石は有能にまじるをもてまたうたるゝなり、われは能もなし、能にも立まじらず、ゆへにうたるゝことなし、また愧をも顯はさずと、山の頂にたてる石い心高くもおもひぬるもあるべし、人にうたれず、うきめをみぬはさもあるべし、もと無能ならばつねにはづべきを、愧あらはさずと思ふは、高き心のひきゝにやあらんかしなど、晋の誰やらん、石ものいふにより、くり言いひたるやうなれども、思ひうかべるをかいとゞ

むるも、旅情をなぐさむのひとつとやいはん、

木曾のかけはしをうちわたりて行、下にのぞめば木曾川の波、いとたかくみなぎりてながるゝに、左右の山高く、巖石峨々として喬木しげりあふ、わづかのそばつたひを行、そのあやうさいふべくもなし、されど危しとおもへば安きのさざしにて、安きと思ふはその危さいふべくもなし、今浮雲の樂しみをわすれて、これぞ身をおふるばかりなりと思ひなすともがらあり、これらは泰山の安きとおもふがゆへに、實は木曾路の危さよりもまされりけり、一歩一行、教にあらざるはなしと、物しり顔に思ふも、旅情をなぐさむのひとつとやいはん、

寢覺の床に至れば、ひとりの僧たちいでゝあないせんといふ、さらばおしへよといふに、扇もてさし示して、岸のあなたにそばたてる石は屏風といふ、そのかたはらは蓮花といふ、硯或はつり船てふは水にちかき石なり、またこなたに高くみゆるは獅子岩といふなんどゝおしゆれば、谷川のおと、松風のひゞき、いと淋しきけしきのたゝならぬをもうちわすれて、いかであの石を獅子といふにや、たゝ一拳石の大きなるにて、ことといしにもかはらぬものを、なぞ名つけ初しや、蓮花といひ、硯なんどいふも、似たるやうにもあらぬをと、人〳〵口〳〵にかまびすしくのゝしれば、あないの僧もせんかたなく、山を下りて見給へとて、つゐにその石のかたはらへ來ておしゆれど、名をきゝて其かたちを見る事なれば、その名に應しぬるやうにはおもはず、もしかたちをみてわれより、こは何に類ひしたりと思はば、名にも應ずべからんものを、名ありて迷ふ、類ひなり、不觚の辨なくば、人〳〵いよ〳〵うたが

ひのみいたくべし、もし此名なくば、その清景をのみ樂しみぬらんを、名あるがゆへに、其形に類ひせざるをとがむるぞかしといふ人もあり、されど名の有無によつて、かばかりの清景をたゞに見んは口おしき事なり、人はたとひ硯といふぞも、獅子といふとも、その名にかゝはらず、たゞその清景を樂しまば、俗僧のあないむれ來ておしゆるとも、わが胸中の清景いかで汚さんやと、かうやうにおもひなば、名もわづらはしからじと、理をもていへば尤なれとも、あないの僧のなくば、いとゞ樂しからんものをとぞおもふも、旅情をなぐさむのひとつとやいはん、

伊勢の宮川をこゆれば神路山を見る、それよりあひのやまをこし、宇治はしをわたりて行、心のうち何となふ清らかに、いとすそうなり、しかるに神官むれ來て、先にたち後にしたがひてゆくもいとうるさし、むかしより秋の月に雲をいひ、春の花にあらしをいへど、いせの御やしろに、神官の多きをいはざりしはいかにぞや、京師の古跡も寺院あるをもて又のぞみをうしなへは、これまた一つのたとへになしてんと思ふも、旅情をなぐさむのひとつとやいはん、

旅中におそるべきは雨なり、かゝるなんどにも油もて製したる紙、あるは布をひきまとひてにはひもくるしく、ことにをくらけれはたゞ〳〵しく、窓なんどより野山のけしき見渡しても、雲きりおほひたれば、遠かたも見へわかず、供の人などもみなしどゞにぬれたるさまみるもくるし、ことに行先の川、水かさそひぬるやとあんじわづらひぬるに、その河のほとりの村長なんど來りて、わが住里の川〳〵、この雨に水まさりぬ、舟にてもわたりかねぬ、

ことに水のきそひ行けば、つゝみもおぼつかなければ、いまはぞはつゝみおしながしけんもしらず、さすれば宿驛は水中の里となり、里の子らはみな巨魚の腹中に葬らるべし、まづこゝへとまり給へ、おして行たまふとも、むかしより帝王の御心にもまかせ給はぬとかやのたまひしも川水なれ、ゐぬて行給ふとも舟もなく、まゐて棹さすものとてもなしといふにぞ、地の險易委曲しらされは、何をもておしなじるべき、されど人〳〵心のうちは信しかたけれどもせんかたなし、まゐて潦水をこへ、またゝ萬頃の田のも、一湖水の如くなりぬるを見るのくるしさ、たとへいふべきものなし、苗の葉末のみゆるは、水さりてのゝちもたのみありといふ、とまれかくまれ雨はどくるしきものはあらじ、されども旱天の項、勃然の雲、沛然の雨はよろこびぬべけれ、このときにのぞみなは、雨ほど貴きものはなしといふべきにや、有明のつれなきわかれをしたひて、いつか曉もうき物になしたるも、さりがたき情をゞよくつくしたる事なれと思ひぬるも、旅情をなぐさむのひとつとやいはん、

○いぼの多く出來る事あり、それには敗毒散に白朮薏苡仁（藥の一劑はと入る）を加へて用ゆれは忽ち減じ侍るなり、

○萩の葉、および枝根とともに、馬をなつくる良藥なり、葉を陰干にしてたくはへをけば、いつも用ひらるゝなり、飴などあたへてなつけしは、ほどふれば、わするゝなり、萩にてなつけしはわするゝ事なし、

○畵賛かくにもそれ〳〵心得は定りたるものから、かの水月とて、何にもよせそのこゝろ得の定りて定らぬをいふ、禮を宜といふが如くとぞ、一定しでとり合ひのあしきも、その法にまかせぬるぞ、かの

膠柱のあなどりを得、又は無喪右拱のそしりをうる事にこそ、

○王學はいと高きが禪意に歸し、はては、たゞわが心の動かぬ事をなんもはらとして、今日のつとめに怠り、倫理に背く媒となる事あり、明末の風をもてもしるべし、されば草創の人のあやまち、一毛より

して大山のたがひに至る、つゝしむへし、

○今の世、俗輩のよき人といふをみるに、あしき事もし得かねぬる人なりといふものあり、いと激説なれど、一理なきにしもあらず、たゞよらずさはらず人の心に應して、その時のやうおかしくしなし、輕薄にして實意なく、時に應じものにしたがひ定見なきを、今俗輩にてはよき人といふなり、

○かたかいといふ貝あり、しじみの如くにて姿は横ひろし、この身よりいづる水を疱瘡の目の内へ入たるにも、よりの出來ぬるにもつくれは良効あり、

○ある藩の士いたづきにかゝれり、疝のかたちにて上へ攻め、胸のあたりにてたへがたくいたみけり、諸醫來りて醫すれどもせんなし、同藩のかろき士來りて、われに一方あり、こゝろみ給へかしといふ、さらばとて乞たるに、木の皮の如きものの出して水煎し、溫服させたるが、咽へ下りたると覺ゆるよりして、いたみ少しいへぬ、日哺までに二三服用ひければ全癒したり、あまりに奇なりければとひたづねしが、ぶなといふ木の皮なりとぞ、夫よりこゝろみ侍るに、其症にあたれは奇効を奏すとなん、橙皮など加へて用ゆるもよしといふ、

○きうりをきざみ、水にひたして貯ふれば、湯火傷を治す、ある家の下部女、汁なべもちいづるとて、あやまちてその鍋をかへしたるが、むねより腹までその熱汁をかけぬ、夫より狂氣の如く室中をおどり

廻りて、水たゞへをくかめのうちへ入らんとせしを、みな人いたきとゞめ、かのきふりの水をそゝぎかけしが、いたみやゝしりぞきぬ、其あるじそれより外面へいでゝ、黄昏のころかへりしが、かの女、常の如く水汲なんどしける、奇効ことにすぐれしと、其人語りぬ、

○ある説に、脚氣腫に、八所の灸など多くしぬるはいとさらふ事なり、おのづから火毒上へのぼりて、逆氣の勢ひをたすくといふ、この症、脉浮大數なるは越脾など用ゆる症なり、下より濕邪をうけ、また上のかたを鬱閉すれば浮大數とは成りぬ、就嘔なども越脾の目あてなり、又いよ〳〵心をつきぬるやうになりぬれば、蘇子降氣湯を投ず、これも去桂加沈とかや、桂附の類はことにいむへし、たゞ用ひてよきは麥小豆米のかゆなり、やまひをもきは小麥を主にし、かろきは麥を主にし、またかろきは米を主にす、鹽などをもいみ、肉をいみ禁じぬるなり、この術を用ひて藥を服すればおほく効あり、

○ふぐてふ魚の毒にあたりたるには、するめをもつて解するいと奇なりといふ、ある人毒にあたり、恍惚として人事をわかざりしを、するめを引さきて口へおし入しが、忽ち腹滿消してよみかへりしとぞ、あとにてきゝしに、何かしらざるうち、するめの匂ひ鼻へ入しかば、少し氣つきたるやうなりし、口よりそのするめの汁腹中へ入しかは、忽ち腹滿それに隨ひて消し、精神たちかへるやうにありしと言しとぞ、類編の魚の部、博雅をひきて、鯸鯔鮠也、背青腹白、怒其肝殺人、正之人名爲河豚者也、然則豚當爲鮠とをん、いかにもふぐの毒あるとなきとはわかす、あしき事してもの幸に罪をまぬかれ、よき事をなす人も不幸あるをみてまよふは、凡人の淺ましき心はへなり、されは河豚は一切にみな毒ありと思ふべし、

○月額てふ事は、一扁上人繪緣起、又は春日驗記の畫にもかいてあるなり、太平記に、片岡八郎矢田彦七アラ熟やトテ、頭巾ヲ脫テ側ニ指置ヲ、山伏ナラヲバ月額ノ跡カクレナシともあり、

○いまの世に、地名またはわが名なんどを雅にしなさんとて、さまざまかきなすこそ心得ね、唐山の人によませんと、しゐて思ふべからず、かれよまんと思はば、唐山にて我國の事をまなぶべし、かの國の事にも俗語あり、官府語あり、我國にて解せんとおもへば、よくかの書をまなべは通ゞぬるなり、わが國の人のよみやすからんとて、和語を用ひぬる事はなきなり、されば漢字もて文つくるとても、しゐてかの國の人の解しやすからん事を意とするはつたなし、詩などは文字の定もあればともかくもなり、それとても築地を月池とする類は、いと淺まし、綱目、唐開元十三年、擇材勇者爲番頭とあれば、いま士の一組の頭を番頭といふも、ことはり、なきにしもあらざるめり、

○今代唐六典の例によて欠畫の事あり、むかしはなき事にて、入木道にもその論はなし、唐山にては、宋の欽宗の諱をさけ、桓を栢につくり、又は威公と書るあり、又清刻の本は玄を玄に作り、燁を燁につくる、乾隆曆本に、時憲曆といふを時憲書といふ、當帝の諱弘曆なるをいみしなり、もし二を欠畫せば一とや成べし、一字の欠畫は古字にても用ひなん、古字なくばいかゞせん、いづれむかしはなき事なり、

○ひしこづけといふものあり、酢一升、酒一合、鹽一合、此三ッを合せ、よくにてさましをき、そのうちへひしことといふ魚の頭と尾をさり腸をとり、よくく あらひてひたしをけば、二日ほど過て見るに、骨きへうせぬるにや、肉になりぬるにや、聊の骨もなし、人く 奇として くらふ事なり、しかるに其三品の量、いさゝかにてもたがへは、骨き

ゆる事なし、されば調藥の分量なんぞも是にてしるべし、いにしへは藥せんずるにも、爛水を用ひ、長流水をくみ、逆水順流のたがひまで論し、ひとつ〳〵藥の量もありたるを、今は人參など高價なれば、少し入るといふも淺まし、こにと調藥意を用ひざる輩もあまたあり、なげくべき事なり、此國の人、唐山へ漂舶してかへりしものべきくに、多くかの醫は病をうかゞひて、用ゆべき藥、分量までかい付てかへるなり、そのかいたるものを藥店へもち行は、此にて調藥し與るといへりとぞ、おもしろき事なり、

○淺草の仁王門、火災後つくりたころ、佛像つくるもの多くあつめてはからせける、ひとり乞侍るには、人のいかほどにてつくらんといふとも、その半の費用もてつくるべし、されどまづ、ゐりしまゝにて門へ出しをぎ、百日過てのち、丹青ほどこすべし、この事ゆるし給はばつくりてんといふ、これによてつくらせけるが、初めの乞しでとくつくりおはり、丹青ほどこさずして、その仁王の像を出しをき、みづからとくより來りて、その像のかげにかくれ居て、多くの人の輿論を聞けり、百日の間とくより來り、くるゝまでそのかげに居たりけり、つゐに其輿論によて其像を添削し、うの後丹青ほどこしたり、されば此像今に至りても、たれ人をゐるものはあらずとなん、晉の戴顒、佛像をつくりて、わが身は帳のうちにかくれ居て、像をみる人のよしあしいふをきゝて、改作り、十とせが程を經てその功を終しといふ事、尙公故實にありとぞ、よく符合しける事なり、

○退閑雜記卷之五

○心にはあらでいかり、又はわらひたはふれ、あるはうれしきさまなんどしぬる、もとより不屑の教誨にあたりぬる事もあるべけれども、おほく巧言令色のたぐひにて、何の誠かあるべき、人をあざぶきて服せんとし、人にあざぶかれじとなすも、みなものしらぬ小量よりこそおこりぬれ、されば其の心、下へ感しぬれば、下よりもまた誠を盡すものなく、あるはかたちをもて禮し、または虛辭を設て心をとるなんどしぬるぞかし、そのこゝろもしあらはれなばいかゞあらん、君とひとの心、みな甲冑を身に帶し、劍槍をたづさへ、城壁にかくれて橋をひき箭たきて居るやうにこそあるべけれ、されば誠の一ッをもてつらぬきぬれば、心うちあらはしぬるとても、誠の外に

何のものかあるべき、されば群下の心も感化して、誠の道にもかなひなん、ものゝかたはしみしものは、政理は別に術あるやうにおぼへ、權詐の事なすものを豪傑などゝいふやうに心得るこそ淺ましけれ、中庸にも只一ッ誠の事とき給へるをもよそになし、君の喜怒ははかりがたきを威としぬるやうに心得、抑揚褒貶刑賞なんども、はかりがたきをたうとみて、君たるものゝ心術、かくあるべき事のやうに思ふ輩もあるぞかし、こはみなわが方寸の智術もて、左右の臣よりして、天下の臣民をもみな欺きとらんとしたるにて、もろこしの帝王のうち、創業せし君も姦詐を用ひぬるそ多き、されば治のすがたなし、面かはりたるやうなれども、功臣つゐに終を全くせず、また末にいたりて閨房のうちよりわさはひ出來、嫡庶廢立の事なんどにも迷ひを生じて、つゐに干戈やむ事なく、かの君臣の心、みなかたみに甲冑き、城池によりて居るが如くなれば、聲音に發する閑とても、いかで美を盡すべき、こゝをもてもおもふへし、

神祖の神聖神武の御德ましく〳〵て、御代永く久しく、四の海波おさまり、藩翰の職よりして末が末までも、其職〳〵をおさめあげて、つかへ奉る事、ありがたき御代のならはし、世々に秀、むかしにこへて、言の葉にも筆にも盡し得ぬかたじけなさ、堯舜の御代、三代の治とても、なぞてこの外やあるべき、さるにものしらぬものが、堯舜三代の治は、此外にもあるやうに心得て、ひそかに政理を議しぬるなんど、いとあさましくおろかなれ、父子君臣夫婦朋友の間も、誠の一ッを本とせずして何かあるべき、天地も誠の一ッなり、その誠をうけ得て生れしはこの萬物なり、萬物の靈はこの人なり、誠の外に何のものかあるべき、私智をもて誠をうしなひぬるゞなけかしけれ、さ

れば、ものしりかはなるもの、又はざへあるものは、猶誠をうしなひて、わが智わが舌もて、何條の事にてもなすべきとおもふ井蛙もあるぞかし、さればざへあるものは薄情なるぞ多き、剛毅木訥は仁にちかしとの給ひける、仁も誠の外にあるべきかは、かの駿臺の翁も西行の、

何事のおはしますかはしらねども、辱なさになみたこぼるゝ、

とよめる至誠の感ずるをひきて誠をときける、小技末藝に至りても、その妙手の塲に至りぬるは、皆この誠にて、天地にもみち、掌にもかくれぬるぞたうとき、よく〳〵工夫たんれんして、修行すべき事なり、戯塲のたはふれなすものあるは女となり、又は老翁となり、あるはいかり、あるはかなしみぬるのみぞ、人は偽どもおもひしれど、世の中にありて、人と交りぬるもの、皆かうやうの巧言令色して、誠をうしなひぬる事となりしをは、露もあやしまざるぞあやしき、

○智囊曰、東漢宋均常言、吏能弘厚、雖貪汚放縱猶無所害、唯苛察之人、身雖廉而巧黠刻剋、毒加百姓、識者以爲確論、いと知言にこそおぼゆれ、すべて事に處し、物にわたりたるものゝいふことはいたづらならず、醫書などみても、温疫論回春なんどの後世の方書にても、醫し覺へたるものゝあらはせしは空論ならずとぞ、經濟の書あらはせしものゝ論說、いとおかしきやうなるも、身にとりて處さゞる事は、朧月夜に道行如く、いとたど〳〵しけれ、地理の事くわしきふみたづさへてたび立に、いとくわしきやうにおぼへても、しらまほしき事はしるさず、ゑきなき事なんどはくわしくて、このふみたづさへずは、たび立日よりあないの人をつれなんものをとくゆも有べし、たとひふみにかゝずとも、その地通行せしものにあひて聞ぬれば、い

さゝかきく事もゐきある事にて、おほくの記行なんぞみしよりもまさりぬれ、ある儒者の政理の事などかしこくいひたるにむかひて、君は大廣殿を見給ふまじ、大廣殿をみては、天が下の政理に一ことといふべき事は及ばざるをしるなりと計りいひける、たれやらんといひし醫師のもとへ、醫師來りて、儒者ともいへば、醫論ことしくいひたれば、そのことたへもせず、予は酒をこのみぬ、瓶子をふりみてことゝしくおとのしぬれば、こは酒こそ多かめれとて、盃にうけたるにいと少なし、多く入たるときは、瓶子ふりてもおとはせずといひければ、口たゞきけるものはぢけるとぞ、かの周勃が漢高の太子廢立のまよひにあたりて、臣、口いふ事あたはざれども其不可をしる、期々詔を奉せずといひためる、その誠に感しける、されはさまゝに理をいひつめ、辨を工にしたりとも、實に感ずる一ことには及ばざりけり、實地をふみ實事に處したる人のことこそ尊けれ、

○水府の人よく卜筮の事なす者ありけり、ある日、野邊へ行けるに、女のものつゝみたるものを手にして、はるかの山のそばを行けるにぞ、その人へ手にもちたるものは何にやあるらんといへば、忽ち桃なるべしといふ、數はととへば、廿四あるべしといふにぞ、人をしてみせけるにその言の如く成りし、いかにしていひあてたるといふに、とひにしたがひて、みれば女のそばつたひ行に、風ふき來りて股のみへしにぞ、桃とはいひけり、その股しろかりければ、四六廿四といひけるとぞ、かの東方朔か上林のなつめ四十九枚ありけるを、いひあてたりといふにも類したり、心に邪念なく、たゝひとすぢにおもふ事は、いと神なるものぞかし、いやしき商人有りけり、痘瘡のま

じないするもの、いふ事露もたがはず、もとより金錢むさぼる事もなかりしが、ちかき頃、痘いと行はれけるとき、初のほどはよくいひあてけるが、その名きこへて、諸侯よりも銀子なんど多く給はりたるよし聞へたれば、これより後はいふ事神なるまじと、予なんどいひけるはたしてひとつ〳〵にたがひて、みづからもいぶかしくや、ことしは氣候順ならずや、わがいふ事みなたがへりとてなげきける、されば明斷てふ事も、私欲にかちてこそ、誠の明斷には成りぬへし、いま器量ある人と俗間にいふは、たゝわがおもふ事の是非も問はず、我儘にいふをさして、器量といふも明斷といふも、只誠よりいづるにあらざれば、酒のみて口きくもおなじことゝやいふべき、

○群談採餘曰、楚莊王夜燕群臣、出美人勸酒、燭爲風所滅、有一人牽美人衣、美人曰、有人牽妾衣、已絶其纓矣、上曰、飲人以酒、而復以較之可乎、遂命盡絶其纓、謂之絶纓會、後楚莊王與晉戰、一人直前犯難、解楚圍救出莊王、王見其身帶重傷問之、答曰、臣乃蔣雄也、昔日絶纓會上蒙大王不殺之恩、故來報答矣、

恩に報ゆるは人のつねなれど、報のために恩あたふるは、わが身にはぢこせしが、今人はわすれにきといふ事、よく人のいひぬる事なり、その心もて恩施しては、たれかおもひしたふべき、もとよりあしき事似するよりは、よき事似せぬるぞよきといふは、わらべなんどをおしゆるの道にして、志ある人のおもふべき事にはあらず、もとより報あらんとて、恩はぢこすにもあらざれば、はぢこせし後は露も心にとゞめず、されば報の有無は心にあらず、みどり子の井にいるをすくふは、何の爲にもあらずといひけんやうに、只一つ誠に

てこそすくふべかめれ、人の心あるものは、その誠にいかで感せざらん、感せずとても何かおもふべき、

○唐玄宗西幸、車駕自延英門出、楊國忠請由左藏庫而去、上從之、望見千餘人持火炬以俟、上駐蹕問曰、何用爲此、國忠對曰、請焚庫積無爲盜守、上歛容曰、盜至若不得此、必厚歛於民、不如與之、無重困吾赤子也、命撤火炬而後行、聞者皆感泣、各相謂曰、吾君推恩如此、福未艾也、雖太王去豳、何以過此乎、

國をはろばし給はざるは、此誠のあるによりけん、漢武も終に神仙の事さとり給ひし明處ありければ、さばかりの迷ありけれども國をうしなひ給はざりしなり、英雄ともとなへ賞する君は、大事は明らかに斷し、小事にはゆるかせにし、大なる事には欺かれず、末なる事に油斷するにぞ、凡人より見ても、いとおろかなる事のやうにおもひぬる事あるものぞかし、たとへていはゞ、坂につまづかずして、平地につまづきたをれぬる如く、心のおこたりよりして、しらずしらず欺かれ、本心うしなふに至るなり、ことに漢武の英主、惠文の餘澤をうけて、何ともしき事もなく、かけたる事もなく、たゞ心のまゝならぬは命數なり、されば不死の藥得てんとのぞみ給ひしより、妄誕としりても、もしや得てんかとの空たのめにて、つゐにかくは迷ひ給ひしなり、凡下の心よりはおもひつかざるのぞみのやうにあれども、それはわが心の如くなき事のみ多ければ、不死の藥なんぞの事は露もおもひよらざるなり、象箸よりして玉杯をのぞむ如く、萬の事みちたりても、のぞみねがふ事はたゆるものならず、これもたゞわが方寸の明鏡もてみなば、小も大も遠も近ものがるゝ事なく、明らかにてらさぬくまはあらじを、たゞこゝの處たらざれば、つ

ゐにそれよりして迷ひを生し、名をうしなひぬるぞかし、

○風眼とて、俄にいたみ失明する眼疾あり、生姜汁を眼中へいるれば痛定りいゆ、

○温疫論一本あり、今板行する書と小異あり、劉吳なんどの序もなく、又可の自叙ありて、徐遂先生鑒定、攜李石臨初扁江徐天章兩先生參較、とあなり、板行のかたには募原なんど多くかけり、このかたにはみな膜原とありて、募の字かいたる所はなし、劉氏の序に、此書近鮮傳板、予因重爲校、梓以公之、とあれば、そのまへの書なりや、

○水東日記曰、古人好尚多簡而實、後世則繁而僞矣、如碑刻一事亦可見、漢魏碑多不著書人姓名、唐碑多書其人、而亦多實、歐虞顔柳李北海等碑是已、今人詩文尚有僞爲他人姓名、若碑志中所題書篆人、則例借名公顯人官銜姓名、間雖有一二從實者亦不多見也、近年胡祭酒文多求蔣廷暉書入刻、東里詩文集序、皆出程南雲隷書、吳思庵懲卿人僞作張宗海修撰之文之、故晩年文字自書、今印行祥刑要覽序可考、此意猶爲近古若古若如予前所記元人金臺集前後序跋之類、悉出名人親筆則又加少也

序はその事をついづるにて、善書のものにかゝしむるは、てらふ心よりこそ生すれ、予むかし求言錄となんいふ書を撰したるが、その序、予のかゝんもいかゞなりといへば、東江源嶙にこそかゝしめよといふ、つるにかゝせしなり、その頃は書の工拙もしらでありけり、加納侯の嫡子久周朝臣、予としたしかりしかば、その書見給はんとのぞまれけり、ひろく人に見せぬる事は禁じたれど、ひたすらの求めにぞ、せんかたなくみせけるに、この序、東江にかゝせし事をとがめられける、これによて予も始めてさとり、いと愧入ぬ、ことに始め

はさも思はざりしが、少しく文などの味ひもおほへてければ、その拙さもはづかしく、體裁もまた心にかなはざる事ありければ、他見を禁し置たるうへ、予もその後大任になふ事となりてければ、たはれにかきし雙紙なども、はや人々もて遊ひ、はては僞作もおほく、何か畫賛などゝて、よそよりもみせにこしたる類ひ少なからず、ある人傳寫するやうに聞へしかば、右やうのものはさらなり、詠歌などもいたく秘して他見を禁じけり、辭職の後もいまだ何くれと人のいひもてはやせば、著述をも人にしめさず、十種などは、予か文もなくたゞあつめしものにて、辭職より年月隔りぬれば、人にもみせしなり、この久周朝臣は才たかく、しかも學問をこのみて、すぐれたる事おほかりき、

○近侍のひとへ讀書の事おしゆるに、まづ唐鑑貞觀政要の類みるべし、こはおもしろきと思ふ所のみ見て、よみ得ざる所、又は解し得ざる所は、うちすてゝたゞおほくみるべし、事實なんぞ記臆せんとも おもふべからず、文字の四聲などにもかゝはるべからず、それより綱鑑なんぞみ、通鑑なんぞみるべし、その上い渉筆にてもあれ、何にても開卷して、おもしろからずは又ことふみをみるべし、かくして年月經れは、初めよめざりし所も讀め、解し得ざりしも解して、おなじ事みるたびに、おのづから記臆するやうには成りぬるなり、たゞくりかへし丁寧玩味すべきは經書なり、その餘はいかほども略して、めをわたしぬるを要とするとはみちびくなり、

○ある人のおしへしに、菊の春もへ出る頃の芽をとり、夏はさかふる葉末をとり、秋は華をとり、冬は根をとりて、末にして丸し服すれば、

利氣血輕身延年の藥なりと、予も服用せし香氣凡ならず、いとこゝろよくぞおぼへぬ、

○ある家のかまどのあたりに薪多くつみおきけるに、近隣の老翁きたりて、もし此薪へ火うつりなば大事なるべし、外へこそうつし給ふべけれと諫しが、露もきかでありけり、はゞ經てかまどの火、その薪へうつりてもへあがりたりければ、皆人あはてさはぎけり、ひるの事なれば、人〳〵多くはせ集り、水などもちはこび、つゐにその火をけしてけり、その時おなじくはせ集りて、調度なんどもち出し、くらの戸うちかためて、さはぎたるものどもへも、主人、より酒多く出して、こたびの變事にはせ集りて、ゆゝしきはたらきし給はずは、わが家も烏有となりぬべしとあつく禮いひてけり、しかるにかの老翁の諫きかざりし事もおもはず、諫めし言葉を謝する意もなく、たいまのはたらきせし人々をあつく謝しけるぞおろかなる、疾のいまた發しざるを、いしたる功は人もしらで、やう〳〵に疾すゝみ行たるを、いしたる功を人々謝するぞ、本をうしなひたりとはいふべき、代々のためしなどみても、天下國家へ功たつるもの、人々いひとなふのみにはあらず、かの翁の諫用ひ侍らば、災もなく人もしらざる上功いかはぞもあるべし、眼うとければしれがたくこそあれ、その功しれがたし、いちじるしき功たてんとおもふは利欲による にて、國家の爲に功たつるにはあらず、わが身の爲にたつるなり、かの吉益氏はいと豪傑にてぞありける、門に入りぬるものあれば、何にてもあれ、ぞうりつくり、がさつくり、又は彫刻し、又は木偶人などつくりぬるともして、それにて世をすぐすわざ一つすべし、その事しおぼへたらば、其後にこそいの道おしへなんといひける、いかに

といへば、醫の道もて妻子をもやしなはんとおもへば、利欲の心主となりて、人にへつらひて、わが規矩をたつる事をせず、されば醫の道をうる事かたし、醫の道世に行はれずば、かのし覺へたる、かさつくり、わらじつくりても、世をすでさばやと、生産に心をわづらはされば、おのづから醫の道をも得ぬるとはいひけるとぞ、いとたうとき事になんありける、その心にあらねば、人はしらでも上功のたつときをしり、人しりても中功のつたなきをはづる心はへにはなりかたかるべし、

○橘といふ字、櫞とかき侍るぞいぶかしけれ、櫞はたちばなにはあらず、このあぶらもて木にながして、朽せまじき料にするといふをもて、かの瀝青なんどに引あて侍るは、あやまりともしるていふべからじ、様棠を欺冬とし、子規を郭公とするたぐひは、あやまり傳ふるともいふべき、

○多夢の人ありけり、紙を五分ばかりに丸くたちて、のりもて臍の下へはり置ていぬべし、帶などもよくしめて、そのはりたる紙の動かざらんやうに用心せよとおしへければ、神心おさまりて、多夢の症はいるぬ、

退閑雜記卷之六

○群談採餘曰、鄭國諸生訕議執政、咸陽諸生誹謗君上、幸而遇子產、則不毀鄉校、不幸而遇祖龍、則便下毒乎、又曰、孔子曰、邦無道、危行言孫、夫祖龍無道甚於虎狼、括囊自晦、猶慮其及之也、矧身無言責、顧呶呶而橫議乎、宋南渡後、此風猶競、雖卷堂有文、畢竟何益、我朝深懲此弊、設臥碑於學宮、戒諸生不許言事、其所以洗濯士心、培養士氣、如保處子、意深遠矣、われ立敎館をつくりて敎育す、初めに其令をかいたるが、專ら人をそしり政事を誹議すべからゞといふ事、ことはりせめてかいたり、臥碑の意におもはず合したりとやいゝん、

○泰西水法曰、高地作井、去審泉源所在、其求之法有四、

第一、氣試、